

香川県埋蔵文化財センター年報

平成 21 年度

2010.9

香川県埋蔵文化財センター

は　じ　め　に

香川県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査及び研究を行うとともに、その保存と活用を図り、県民の文化的向上に資するため、昭和62年11月1日に設立されました。

平成21年度は、埋蔵文化財の発掘調査及び整理、報告書刊行、出土品の保管・管理、普及啓発事業、緊急雇用創出基金事業、讃岐国府跡探索事業などを実施しました。

発掘調査事業は、病院建設、県道整備、河川改修、県立学校移転などの事業に伴って、8遺跡で10,481m²の発掘調査を実施しました。

整理・報告事業では、病院建設、県立学校新設などの事業に伴う2遺跡の出土品の整理と、県道整備に係わる遺跡の報告書を刊行し、調査成果を公表しました。

普及啓発事業では、当センターの展示室で常設展を行う以外に、四国の埋蔵文化財センター合同の巡回展「続・発掘へんろ～四国の旧石器・縄文時代～」を始めとした特別展や、「埋蔵文化財発掘調査速報展」などの展示を行うとともに、出土品を地元で公開する「ふるさと展示」を県下各地で行いました。また、広報誌「いにしえの讃岐」や研究紀要の刊行以外に、学校での出前授業や考古学体験講座を通じて、埋蔵文化財の保護意識の普及・啓発に努めました。

緊急雇用創出基金事業では、当センター設立以前に調査された遺跡の出土品の分類作業などを行いました。また、遺跡の記録写真をデジタル化して保存性を高め、そのデータをホームページで一般に公開することを前提にした、検索システムを構築しました。

今年度から新たに開始した事業として、讃岐国府跡探索事業があります。この事業は従来不明確であった、讃岐国府の実態を明らかすることで地域の活性化を目指した事業です。4年計画の初年度に当る今年度は、最有力候補地である坂出市府中町周辺に的を絞り、ボランティア調査員を中心にして地名調査、地形調査、発掘調査を実施しました。また、讃岐国府の解説書として「讃岐国府跡を探る」を刊行しました。

最後になりましたが事業の実施に際して、ご指導、ご協力をいただいたい関係各位にお礼を申し上げますとともに、当センターの運営につきましては、今後とも皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げ、ごあいさつとします。

平成22年9月

香川県埋蔵文化財センター
所長 大山真充

目 次

I	組織・施設・決算	
1.	香川県埋蔵文化財センターの組織	1
2.	施設の概要	2
3.	決算の状況	2
II	事業概要	
1.	埋蔵文化財調査事業	
事業概要		3
旧練兵場遺跡（普通寺養護学校）		5
津森位遺跡		7
飯野・東二瓦礫遺跡		9
西白方瓦谷遺跡		11
飯山北土居遺跡		13
旧練兵場遺跡（普通寺病院）		15
石田高校校庭内遺跡		17
多肥北原遺跡		19
多肥北原西遺跡		21
2.	普及・啓発事業	
1	展示	23
2	現地説明会・地元説明会	24
3	講師の派遣	24
4	坂出市立府中小学校との連携授業（よろこび学習）	26
5	夏休み子どもミュージアム	26
6	考古学講座	26
7	文化ボランティア活動	26
8	四国新聞への連載	26
9	資料の貸出・利用	27
10	職場体験学習・インターンシップ	27
11	刊行物	27
12	ホームページ	27
3.	緊急雇用創出基金事業	
1	学校及び地域等における出土品の活用推進事業	28
2	埋蔵文化財資料のデジタル化推進事業	29
4.	讃岐国府跡探索事業	30
III	讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告	32

挿図目次

第1図 発掘調査遺跡位置図	4	第14図 石田高校校庭内遺跡 道構配置図	18
旧練兵場遺跡(普通寺養護学校)		多肥北原遺跡	
第2図 調査区位置図	5	第15図 遺跡位置図(1/25,000)	19
津森位遺跡		第16図 多肥北原遺跡 道構配置図	20
第3図 遺跡位置図(1/25,000)	7	多肥北原西遺跡	
飯野・東二瓦礫遺跡		第17図 遺跡位置図(1/25,000)	21
第4図 遺跡位置図(1/25,000)	9	第18図 多肥北原西遺跡 道構配置図	22
第5図 古墳時代～平安時代 道構配置図	10	讃岐国府跡探索事業	
西白方瓦谷遺跡		第19図 讃岐国府跡調査区位置図	33
第6図 遺跡位置図(1/25,000)	11	第20図 市町本村周辺の地名分布図	36
第7図 西白方瓦谷遺跡 道構配置図	11	第21図 地形分類子察図	38
飯山北土居遺跡		第22図 調査区面上土層断面図	40
第8図 遺跡位置図(1/25,000)	13	第23図 道構平面図1	41
第9図 飯山北土居遺跡付近の空中写真 (国土地理院1962年撮影)	14	第24図 道構平面図2	42
第10図 調査区と検出遺構の概要図	14	第25図 出土遺物実測図	44
旧練兵場遺跡(普通寺病院)		第26図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図1	51
第11図 遺跡位置図(1/25,000)	15	第27図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図2	53
第12図 旧練兵場遺跡 道構配置図	16	第28図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図3	55
石田高校校庭内遺跡		第29図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図4	57
第13図 遺跡位置図(1/25,000)	17	第30図 田村久雄氏所蔵遺物実測図	59
		第31図 錄田共済会導土資料館所蔵遺物実測図	60

写真目次

旧練兵場遺跡(普通寺養護学校)		写真17 土坑墓(西から)	16
写真1 弥生時代後期の堅穴住居跡①	5	写真18 重複する堅穴住居跡(北東から)	16
写真2 弥生時代後期の堅穴住居跡②	5	石田高校校庭内遺跡	
写真3 弥生時代後期の堅穴住居跡③	6	写真19 調査区西半全景(南から)	17
写真4 古代～中世の坪界の溝状遺構	6	写真20 調査区東半全景(南から)	17
写真5 調査区全景(南東から)	6	写真21 銅鏡出土状況	18
写真6 調査区全景(南から)	6	写真22 井戸跡(南から)	18
津森位遺跡		写真23 SK05(西から)	18
写真7 1区全景(西から)	7	多肥北原遺跡	
写真8 2区全景(北から)	8	写真24 1区全景(東から)	19
写真9 4区全景(南から)	8	写真25 SH01竈出土土器(東から)	20
飯野・東二瓦礫遺跡		写真26 2区全景(南から)	20
写真10 古墳時代水田跡	10	写真27 SH11竈(南から)	20
写真11 古墳時代溝状遺構	10	写真28 井戸跡(南から)	20
平安時代～室町時代溝状遺構	10	多肥北原西遺跡	
西白方瓦谷遺跡		写真29 1区掘立柱建物跡(南から)	21
写真12 調査区全景	12	写真30 2区全景(南から)	21
写真13 弥生時代堅穴住居跡	12	写真31 土師器出土土坑(西から)	22
写真14 弥生時代堅穴住居跡	12	写真32 3区全景(西から)	22
飯山北土居遺跡		写真33 3区掘立柱建物跡(西から)	22
写真15 東区 調査実掘状況(西から)	13	緊急雇用創出基金事業	
旧練兵場遺跡(普通寺病院)		写真34 写真撮影した出土品	28
写真16 調査区南半部全景(東から)	16	写真35 出土品の接合作業	28

写真36 写真的選択作業	29	讃岐国府跡探索事業
写真37 写真的のスキャニング作業	29	写真39 ミスティーハンター(ボランティア調査員)による
写真38 資料管理システムのトップ画面	29	調査風景

表 目 次

第1表 職員一覧	1	第17表 考古学講座一覧	26
第2表 発掘調査決算	2	第18表 資料貸出・利用一覧(数字は件数)	27
第3表 整理・報告決算	2	第19表 戰場体験学習・インターンシップ一覧	27
第4表 管理運営費等決算	2	讃岐国府跡探索事業	
第5表 発掘調査遺跡一覧	3	第20表 讃岐国府跡調査区一覧表	34
第6表 遺跡の概要一覧	4	第21表 出土土器等観察表1	45
第7表 整理・報告遺跡一覧	4	第22表 出土土器等観察表2	46
第8表 刊行報告書一覧	4	第23表 出土土器等観察表3	47
第9表 展示一覧	23	第24表 出土土錐観察表	47
第10表 入館者数一覧	23	第25表 関連調査資料・土器等観察表1	61
第11表 センター外展示一覧	23	第26表 関連調査資料・土器等観察表2	62
第12表 現地説明会・地元説明会一覧	24	第27表 関連調査資料・古代軒丸瓦観察表1	62
第13表 体験講座への講師派遣一覧	24	第28表 関連調査資料・古代軒丸瓦観察表2	63
第14表 学校への講師派遣一覧	25	第29表 関連調査資料・中世軒丸瓦観察表	63
第15表 講演等への講師派遣一覧	25	第30表 関連調査資料・軒平瓦観察表	63
第16表 坂出市立府中小学校との連携事業一覧	26	第31表 関連調査資料・銅錢観察表	63

写 真 図 版 目 次

讃岐国府跡探索事業

図版1 航空写真

讃岐国府跡付近空中写真

(上が北、国土地理院1962年撮影)

図版2 遺構

調査地遠景(南東より)

第1 遺構面全景(西より)

図版3 遺構

第3 遺構面全景(西より)

第4 遺構面全景(東より)

図版4 遺構

南谷に残る掘削状の平坦地地形(西より)

SP10遺物出土状況(南より)

SK02遺物出土状況(南より)

SP08遺物出土状況(北より)

現地説明会風景

図版5 土器・陶磁器

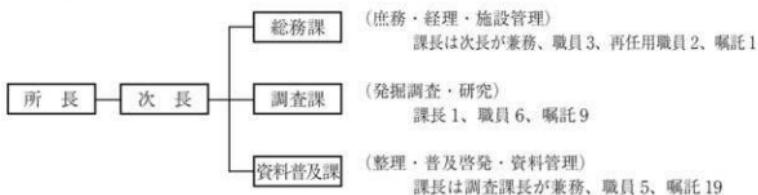
9 25 26 32 40 50 58

※ 地図は国土地理院地形図を使用しました。

I 組織・施設・決算

1. 香川県埋蔵文化財センターの組織

(1) 組織



(2) 職員

所 屬	職 名	氏 名
所 長		大山 真充
次 長		深谷 右
総務課	課長(事務取扱)	深谷 右
	副主幹	林 文夫
	主任	宮田 久美子
	主任	古市 和子
	主任	広瀬 健一
	主任	安藤 正
	嘱託	吉村 高志
調査課	課長	西岡 達哉
	主任文化財専門員	北山 健一郎
	文化財専門員	森下 友子
	文化財専門員	木下 晴一
	文化財専門員	山下 平重
	文化財専門員	藏本 晋司
	文化財専門員	松本 和彦
	嘱託	砂川 哲夫
	嘱託	木全 加珠美
	嘱託	今井 千佳子
	嘱託	藤井 菜穂子
資料普及課	課長(事務取扱)	西岡 達哉
	主任文化財専門員	西村 尋文
	主任文化財専門員	森下 英治
	文化財専門員	宮崎 哲治
	文化財専門員	信里 芳紀
	文化財専門員	乗松 真也

第1表 職員一覧

2. 施設の概要

(1) 所在地 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

(2) 敷地面積 11,049.23m²

(3) 建物構造・延床面積

①本館	鉄筋コンクリート造・2階建 (一部鉄骨造・平屋建)	1,362.23m ²
②分館	鉄骨造・2階建	337.35m ²
③第1収蔵庫	鉄骨造・2階建	1,525.32m ²
④第2収蔵庫	鉄骨造・3階建	2,040.33m ²
⑤車庫	鉄骨造・平屋建	29.97m ²
⑥自転車置場	鉄骨造・平屋建	25.00m ²

3. 決算の状況

(単位:円)

原因者	遺跡名	決算
道路課	多肥北原西遺跡	6,279,924
	多肥北原遺跡	17,962,110
	津森位遺跡	18,940,660
	飯山北土居遺跡	4,241,604
	西白方瓦谷遺跡	5,148,515
河川砂防課	飯野・東二瓦窯遺跡	21,967,736
高校教育課	石田高校校庭内遺跡	5,281,508
特別支援教育課	旧練兵場遺跡	15,138,149
善通寺病院	旧練兵場遺跡	46,255,390
合計		141,215,596

(単位:円)

原因者	遺跡名	決算
善通寺病院 (国立病院機構本部)	旧練兵場遺跡	104,160,000
高校教育課	鹿伏・中所遺跡	13,107,534
道路課	津森位遺跡	3,245,274
	高屋条里遺跡	1,487,258
合計		122,000,066

第3表 整理・報告決算

第2表 発掘調査決算

(単位:円)

管理運営費等	管理運営費	6,846,861
	職員給与費(※)	128,415,913
	讃岐国府跡	2,000,152
	探索事業	
緊急雇用 対策事業	小計	137,262,926
	埋蔵文化財資料 のデジタル化推進	8,085,000
	学校及び地域等における出土品の活用推進	4,858,973
	小計	12,943,973
合計		150,206,899

※受託事業分
￥55,663,897 を再掲

第4表 管理運営費等決算

II 事業概要

1. 埋蔵文化財調査事業

事業概要

調査課は、3班体制で県道整備、河川改修、善通寺病院統合等の8遺跡の発掘調査を行い、資料普及課は、4班体制で善通寺病院統合及び高校建設の2遺跡の整理と、県道整備の2遺跡の報告を行った。

発掘調査では、県道太田上町志度線建設に伴う調査を継続的に実施したことや、平成17年度以降中断していた善通寺病院統合事業に伴う旧練兵場遺跡の調査を再開したこと等が特筆できる。

整理・報告は、引き続き善通寺病院統合事業に伴う旧練兵場遺跡の整理が中心となり、3班体制で実施した。

遺物実測について、専門業者に委託したことが特筆できる。

原因者	事業名	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間
道路課	太田上町志度線建設	多肥北原西遺跡 多肥北原遺跡	高松市多肥上町 高松市多肥上町	900 2,086	2月～3月 8月～1月
	多度津丸亀線建設	津森位遺跡	丸亀市津森町	2,449	6月～10月
	国道43号建設	飯山北土居遺跡	丸亀市飯山町	258	12月
	丸亀詫間豈浜線建設	西白方瓦谷遺跡	仲多度郡多度津町	247	10月～11月
河川砂防課	赤山川改修	飯野・東二瓦砾遺跡	丸亀市飯野町	2,981	4月～9月
高校教育課	石田高校改築	石田高校校庭内遺跡	さぬき市寒川町	160	6月～7月
特別支援教育課	善通寺養護学校移転	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	560	4月～5月
善通寺病院	善通寺病院統合	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	840	11月～3月
合計				10,481	

第5表 発掘調査遺跡一覧

遺跡名	遺跡の概要	主な遺構・遺物
多肥北原西遺跡	古墳時代の集落跡。	古墳時代の掘立柱建物跡。 土師器、須恵器、瓦、耳環。
多肥北原遺跡	古墳時代の集落跡。	古墳時代の竪付き竪穴住居跡。 土師器、須恵器、耳環。
津森位遺跡	弥生時代及び平安時代の水路跡。 室町時代から江戸時代にかけての集落跡。	弥生時代及び平安時代の溝状遺構。 室町時代から江戸時代にかけての井戸跡。 室町時代から江戸時代にかけての集落跡。 弥生土器、土師器、須恵器、縁釉陶器、曲物。
飯山北土居遺跡	室町時代の城館跡。	室町時代の溝状遺構。 土師質土器。

西白方瓦谷遺跡	弥生時代の集落跡。	弥生時代の堅穴住居跡。 弥生土器。
飯野・東二瓦窯遺跡	弥生時代の河川跡。 古墳時代の水田跡。	弥生時代の河川跡。 古墳時代の水田跡。 弥生土器、石器、土師器、須恵器、帶金具。
石田高校校庭内遺跡	弥生時代から古墳時代にかけての集落跡。 鎌倉時代の集落跡。	弥生時代から古墳時代にかけての溝状遺構。 鎌倉時代の柱穴跡。 弥生土器、銅鏡、土師器、須恵器。
旧練兵場遺跡	弥生時代から古墳時代にかけての集落跡。 古代から中世にかけての集落跡。	弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居跡群、掘立柱建物跡群。 古代から中世にかけての溝状遺構、柱穴跡。 弥生土器、石器・石製品、土師器、須恵器。

第6表 遺跡の概要一覧

原因者	遺跡名	所在地	整理期間
普通寺病院（国立病院機構本部）	旧練兵場遺跡	普通寺市仙遊町	4月～3月
高校教育課	鹿伏・中所遺跡	木田郡三木町	4月～3月
道路課	津森位遺跡	丸亀市津森町	平成20年度
	高屋条里遺跡	觀音寺市高屋町	平成20年度

第7表 整理・報告遺跡一覧

書 名	
県道丸亀詫問豊浜線（觀音寺工区）及び県道多度津丸亀線（丸亀工区）緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	高屋条里遺跡・津森位遺跡

第8表 刊行報告書一覧



第1図 発掘調査遺跡位置図

きゅうれんべいじょういせき 旧練兵場遺跡（善通寺養護学校）

普通寺養護学校移転に伴う平成21年度の旧練兵場遺跡の調査は、平成20年度の北側に隣接する区画において実施した。調査の結果、弥生時代から中世にかけての幅広い時代の遺構を確認した。

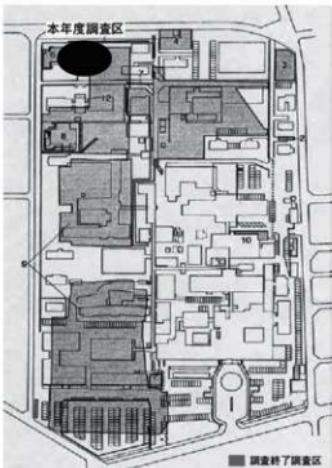
弥生時代の主な遺構としては、竪穴住居跡や土坑、溝状遺構がある。検出した竪穴住居跡は概ね、弥生時代後期から終末期のもので、昨年度の調査区にまたがるものも検出している。平面プランには五角形のものと方形のものとがあり、いずれも床面にはベッド状遺構を有する。五角形を呈する竪穴住居跡のベッド状遺構上面からは、刀子と考えられる鉄製品が出土した。東側では、昨年度の調査区にまたがる竪穴住居跡から、数点のガラス小玉も出土している。

土坑には、壺1点が完形のまま出土したものや、土器片を大量に含む廃棄土坑と考えられるものがある。

溝状遺構は数条検出しているが、このうち、調査区東端で検出した溝状遺構は、調査区内で弧状を呈し、そのまま調査区外へ延びている。溝状遺構の最下層からは弥生時代前期の土器片が出土しており、溝状遺構の開削時期は同時期に求められる。弧状を呈する内部には、土坑等の遺構は検出されなかったことから、この溝状遺構の性格は現時点では不明である。

また、昨年度の調査において、多く見つかっている弥生時代中期後半の竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、今回の調査では検出されず、当該時期にはこの近辺は集落域としては機能していなかったものと考えられる。

また、確認した竪穴住居跡の棟数は、昨



第2図 調査区位置図



写真1 弥生時代後期の竪穴住居跡(1)



写真2 弥生時代後期の竪穴住居跡(2)

年度までの検出数に比べると少なく、さらに、今年度調査区の北東部分では、全く検出されなかつことから、今回の調査区の北東部分が旧練兵場遺跡の集落跡の北東端である可能性が高いと考えられる。

古墳時代の遺構は、概して少ない。溝状遺構などがわずかに検出されたに過ぎない。溝状遺構は調査区を斜めに横切るかたちで検出したが、遺物が少なく、詳細な時期の決定には至っていない。しかしながら、弥生時代後期の竪穴住居跡の埋土上面で検出したことと、埋土中よりわずかに須恵器が出土したこと等から、古墳時代に属するものと考えている。

古代以降の遺構としては、調査区の西側で検出した大型の溝状遺構がある。幅3m、深さ2mと規模も大きい。いわゆる条里地割の南北方向に合致する溝状遺構であり、条里の坪界線に当る溝状遺構でもある。最上層からは、鎌倉時代頃の遺物が出土していることから、最終埋没時期は、そこに求められる。最下層からは、古代の範疇で捉えられる須恵器等が出土していることから、開削時期は古代と考えられる。また、埋土中から混入と考えられるが、銅鏡が1点出土している。

今年度の調査は、昨年度の調査区の隣接地であり、面積も狭小ではあるものの、弥生時代後期頃の集落の北東端が確認されたこと、北側には弥生時代中期の掘立柱建物跡は分布しないこと等、今後の旧練兵場遺跡を考える上で重要な知見が得られた。



写真3 弥生時代後期の竪穴住居跡(3)



写真4 古代～中世の坪界の溝状遺構



写真5 調査区全景(南東から)



写真6 調査区全景(南から)

つのもりくらいいせき 津森位遺跡

調査対象地が幅 16 m、延長約 150 m にわたるため、東から順に 1～4 区に分割して調査を行った。このうち、1～3 区までは連続するが、3 区と 4 区の間には谷状地形があるため、調査対象地からは除外されている。調査の結果、1～3 区においては、古代末から近世にかけての幅広い時代の遺構を、4 区では古代末から中世の遺構の他、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構を検出した。以下、地区ごとに概観する。

<1 区> 最も東側に当り、市道を挟んだ東側が平成 18 年度に発掘調査が実施された津森位遺跡（第一次調査）である。現地表下およそ 1 m のところで、黄褐色粘土の地山を検出し、遺構はこの地山を掘削して構築されている。主な遺構としては、大型の溝状遺構が 2 条、小規模な溝状遺構が 3～4 条見つかっている。特に調査区を斜行するように検出した SD01 は、方位がほぼ東西方向に合致することから、本遺跡南側に所在する田村廃寺周辺に認められる正方位を利用した地割りに関連する遺構

として注目される。SD01 からは、京都産の縁釉陶器等、平安時代後期を中心とする時期の遺物が出土しているが、最上層では鎌倉時代の遺物が出土していることから、中世頃にその機能を失ったものと考えられる。また、SD01 と同時期に機能していたと考えられる別の溝状遺構 SD02 は、SD01 と合流するように構築されているが、これは、現在の地割である条里地割に沿って構築されている。異なる方位の地割が混在する点は今後の大きな課題である。

<2・3 区> 1 区の西側に当る調査区であり、1 区と同様に多くの溝状遺構を検出している。そのほとんどが、1 区の SD01 と同じ地割で構築されており、古代末期から中世にかけての周辺の土地利用が主に正方位を基準に設けられていたことを示唆している。また、2 区と 3 区の境界付近では、溝状遺構が直交する場所も認められ、灌漑用水路網的な土地利用を視野に入れて考える必要がある。溝状遺構の多くは、鎌倉時代頃にその機能を失ったものと考えられるが、その後



第3図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真7 1区全景（西から）

は大規模な灌漑用水路網が整備されることではなく、室町時代以降は円形に掘削した土坑の底から取水する、いわゆる出水状の遺構が多く構築される。特に江戸時代には、2区と3区の境界を中心とした地域に合計13基もの出水状の遺構が構築されている。周辺に居住していた人々が農業用水の確保に腐心していた様子が見て取れる。

また、2区の東側では、江戸時代の取水用の遺構の下層に石組の井戸跡が1基検出された。最大径1m程度と小規模ではあるが、最下層に曲物を設置しており、裏込め土中から室町時代後期頃の遺物が出土している。

<4区> 最も西側に当る調査区は、東西に谷状地形がある、いわば中州状の地形を呈する。検出した遺構は、1～3区と同様に溝状遺構が多い。

調査区を東西に横切るように検出した2条の小規模な溝状遺構は、時期的には相前後して構築されたものと考えられる。埋土中からは、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺物が概ね良好な状態で出土しており、周辺に集落等の所在が推測され、当該時期に灌漑用水路として機能していたことがうかがえる。また、本遺跡中最も西側で検出したSD04は幅2m、深さ約1mを測る幹線的な灌漑用水路と考えられるが、これも出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代にかけてのものである。

<まとめ> 今回の調査では、建物跡等の居住遺構が検出されなかったが、これは、今回の調査区（特に1～3区）が居住域ではなく、灌漑用水路が設置された農地に近い土地利用をされていたことを示唆している。また、4区においては、溝状遺構からの遺物の出土状況や周辺の遺跡の分布等を考え合わせると、後世の削平により、居住域が失われたと考えられ、本遺跡周辺までは堅穴住居跡などが所在していたものと考えられる。

今回の調査結果から、丸亀平野西北部においては、弥生時代には、中の池遺跡や新田橋本遺跡、今津中原遺跡等、津森位遺跡周辺には大小の集落が点在していたものと考えられる。また、古墳時代以降は居住域の中心は津森位遺跡及びその南側の田村廃寺周辺に移り、津森位遺跡から西側のエリアは耕作を放棄した荒蕪地として近世の新田開発を迎えることになったと考えられる。



写真8 2区全景（北から）



写真9 4区全景（南から）

いいの ひがしふたがらくいせき 飯野・東二瓦礫遺跡

飯野・東二瓦礫遺跡は飯野山の西麓、丸亀市飯野町東二に所在する。本遺跡は昭和63年度に四国横断自動車道建設に伴って発掘調査が行われており、今年度の調査区は昭和63年度の調査区に南接する。調査区は南北に細長く、東西幅約20m、南北長約150mである。

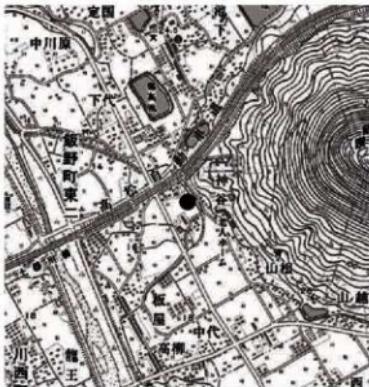
本遺跡からは弥生時代の河川跡、古墳時代のものと考えられる水田跡・溝状遺構、平安時代から室町時代の溝状遺構・集落跡が検出された。

弥生時代の河川跡は調査区のほぼ全域で確認された。幅15~20m、深さ1.0~1.5mを測り、南から北に向かって蛇行して流れる。河川跡からはサヌカイト製の石槍・石鎌や弥生時代前期から後期の土器が出土した。

調査区の北部では水田跡が検出された。水田は洪水により堆積した細砂によって覆われていた。水田を覆った細砂からは奈良時代の須恵器が出土した。また、水田土壤の下からは弥生時代後期後半の土器が出土したことから、水田跡は古墳時代頃のものと考えられる。水田の1区画の形は歪な長方形で、面積は20~35m²を測る。水田跡の東側では南から北に向かって流れる溝状遺構が検出された。溝状遺構は幅3m、深さ1m前後を測る。水田を覆った細砂がこの溝の中に堆積していたことから、水田跡と同時期に機能していた用水路であることがわかる。この溝状遺構から水田への導水施設は検出されなかった。溝底の標高は水田跡に比べ、約0.8m低いことから、隣接する西側の水田には導水しておらず、下流の水田に導水していたものと考えられる。

また、調査区の南部では丸亀平野に残る条里型地割りに合致する溝状遺構が検出された。この溝状遺構は東から西に向かって流れ、幅5~6m、深さ0.8mを測る。溝状遺構の埋土からは平安時代から室町時代の土器や、中国製白磁・帶金具・銅錢が出土した。

今回の調査では弥生時代の河川跡、古墳時代のものと考えられる水田跡、平安時代から室町時代の溝状遺構が検出された。県内では水田跡の調査例が少なく、1区画の形や面積がわかる数少ない事例である。また、古代の帶金具や銅錢、中国製白磁が出土したが、本遺跡では同時期の集落は検出されていないことから、周辺地域に集落が存在したことが推定される。



第4図 遺跡位置図 (1/25,000)



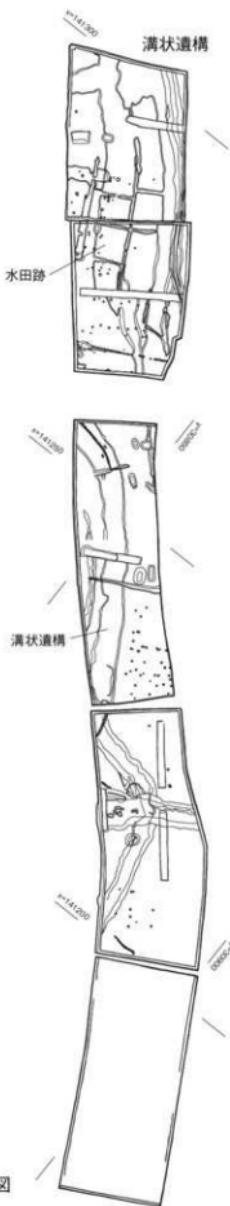
写真 10 古墳時代水田跡



写真 11 古墳時代溝状遺構・
平安時代～室町時代溝状遺構

0
20m
(1/700)

第5図 古墳時代～平安時代 遺構配置図



にしあらかたかわらだにいせき 西白方瓦谷遺跡

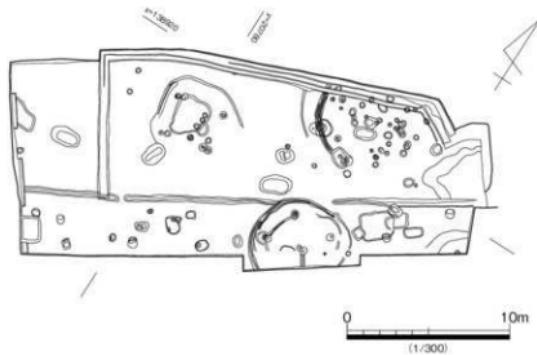
西白方瓦谷遺跡は丘陵の南東側の緩斜面に位置する。平成19年度にも発掘調査を実施しており、縄文時代中期の土坑状の落ち込み、弥生時代の堅穴住居跡、古墳時代の堅穴住居跡、古墳の周溝跡等が検出された。今回の調査地は平成19年度調査地の北東隣接地に当たり、発掘調査以前は畑として利用されていた。盛土を行って畑を造成していたため盛土が分厚く、現地表から1m下で遺構が検出された。

今回の調査では弥生時代後期前半の3棟の堅穴住居跡、弥生時代中期から後期の土器溜りを検出した。堅穴住居跡はいずれも平面形は円形を呈し、2棟は径5~6mを測る。もう1棟は調査区外に連続するため、全体は不明であるが、径8m前後と推定される。

平成19年度の調査では縄文時代の土坑状の落ち込みや、古墳の周溝跡、7世紀の堅穴住居跡が検出されているが、今回の調査地では弥生時代の遺構が確認されただけであった。西白方瓦谷遺跡は標高2~18mの緩斜面に位置する。この遺跡では弥生時代の住居跡は10数棟検出しているが、いずれも標高6~12m付近で検出された。弥生時代には遺跡の立地する丘陵の東側の平野付近まで、海が入り込んでいた可能性もあり、海岸に近接する丘陵部の弥生時代の集落の様相を示す事例である。



第6図 遺跡位置図 (1/25,000)



第7図 西白方瓦谷遺跡 遺構配置図



写真 12 調査地全景



写真 13
弥生時代竪穴住居跡



写真 14
弥生時代竪穴住居跡

はんざんきたどいせいき 飯山北土居遺跡

堀や土塁に囲繞された中世の城館が廃絶し耕地化した場合、堀や土塁の跡が完全に失われずに地割や土地の高低差になって残ることがある。これは周囲とは異質な地割のまとまりとなるため、地籍図や空中写真によって検出できることがある。飯山北土居遺跡は、空中写真判読によって存在が注意され、北辺部の道路工事の際に堀跡らしい遺構が確認されたことから中世城館跡として周知されている。今回、国道438号道路改築事業に伴い、遺跡南部を東西に走っている県道善通寺府中線の拡幅工事が行われることとなり、試掘調査により遺構が確認されたことから本調査を実施した。

調査地は、西1区（ $1.5 \times 5\text{ m}$ ）、西2区（ $2 \times 12\text{ m}$ ）、西3区（ $3 \times 9\text{ m}$ ）、東区（ $4 \times 5\text{ m}$ ）の4箇所である。城館を囲繞する堀跡の存在が想定されたのは西1区と東区である。西1区では、西端で溝状遺構と思われる落ち込みの肩部が検出されたが、溝跡の中心が調査区外になるため、詳細は不明である。東区では、幅2以上、深さ1.5m以上の溝状遺構が検出された。明褐色の粘土で埋積されており、滯水環境の下で埋没した様子が窺える。位置関係から城館の堀に当たる可能性が高い。出土遺物は青磁の他数点の遺物細片のみである。中世のものと考えられるが、年代を特定するものはなかった。西2区では幅3、深さ1mの溝状遺構、西3区では幅3（推定）、深さ1mの溝状遺構が検出された。いずれも黒褐色の粘質土で埋没しており、東区のものとは埋土が異なる。両者とも出土遺物は僅少であり年代を決めることはできず、また、城館に伴うものかどうか遺構の性格を特定することも難しい。

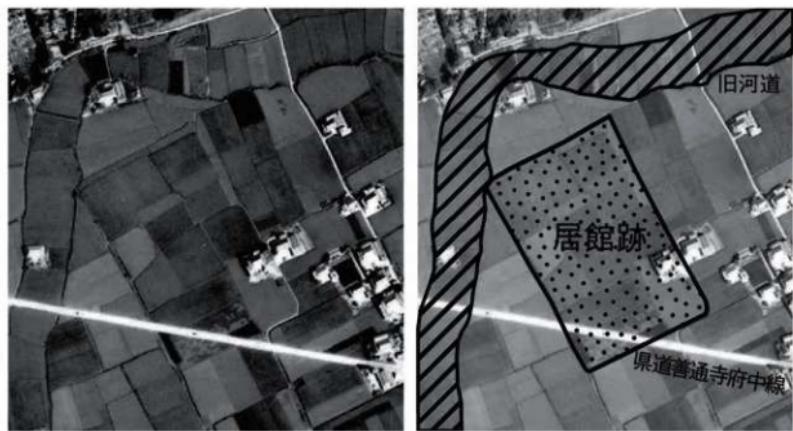
以上、年代決定等の詳細は、今後の調査に待つところが多いものの、地割や地名で想定されていた中世城館の所在について考古学的にも追認できたと考えている。



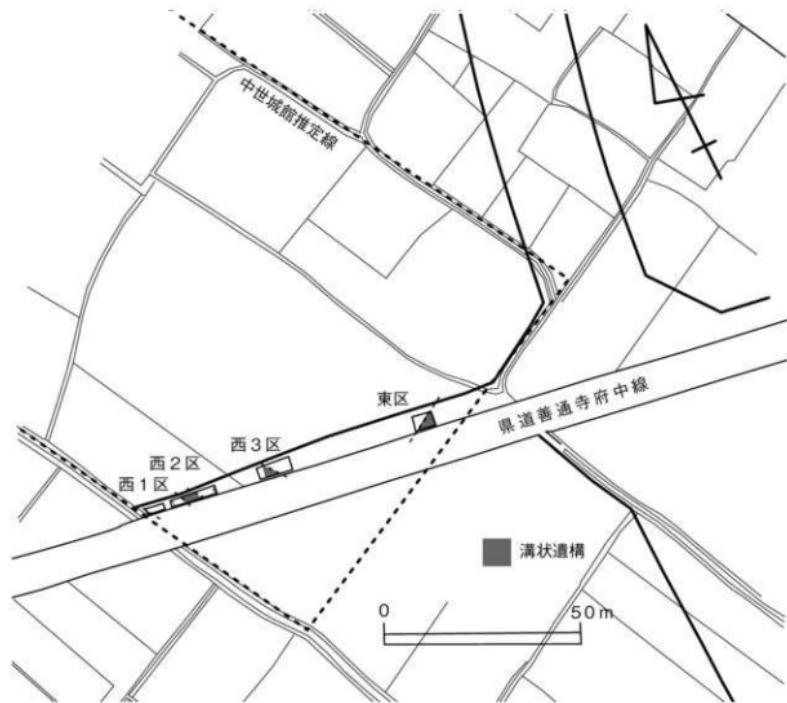
第8図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真15 東区 調査完掘状況（西から）



第9図 飯山北土居遺跡付近の空中写真（国土地理院 1962年撮影）



第10図 調査区と検出遺構の概要図

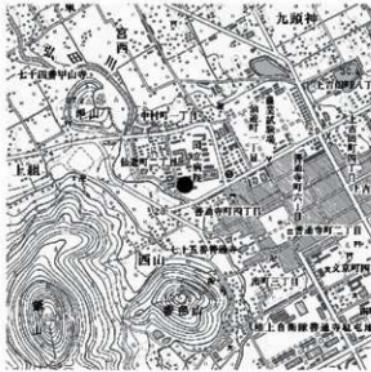
きゅうれんべいじょういせき 旧練兵場遺跡（善通寺病院）

今年度の対象地は、国立病院機構善通寺病院の敷地の南西隅に位置する。調査では弥生時代中期の掘立柱建物跡、土坑墓、弥生時代後期から終末期の竪穴住居跡、古墳時代後期の竪穴住居跡、古代から中世の溝状遺構等を検出した。

弥生時代中期の掘立柱建物跡は1棟に留まるが、建物を復元できなかった柱穴跡は15基を数える。柱穴跡はいずれも対象地の北半部で検出しており、過年度に確認された掘立柱建物群の縁辺部に位置することがわかる。一方、柱穴跡が確認されなかった南半部で土坑墓を1基検出した(写真17)。長方形プランを呈し、最大幅0.6m、検出長1.35mを測る。断面形状は箱型を呈し、底面は舟底状にわずかに窪む。埋土は人骨を包含する堅緻なにぶい黄褐色粘質土が主となり、底面にのみ黒褐色粘質土を薄く認める。棺痕跡は確認できず、小口板の掘り方等も認められないことから、土坑墓(土葬墓)と判断した。人骨は状態が悪いながらも残存状況は比較的良好で、仰臥屈葬したと思われる一体分を検出した。明瞭な副葬品はないが、所属時期は埋土中に含まれるⅢ様式新段階に属する土器や上位に構築された弥生時代後期前葉の竪穴住居跡の存在から、中期後半～後期初頭と考えられる。旧練兵場遺跡では成人墓の検出例は稀少であり、集落構造を考える上では大きな成果である。なお、人骨については九州大学大学院中橋孝博氏に現地で調査指導を頂いた上、その鑑定を依頼している。

弥生時代後期～終末期の主要遺構には竪穴住居跡16棟、古墳時代後期の主要遺構には竪穴住居跡20棟があるが、大規模な撲跡等の影響もあり、多くは一部の確認に留まる。注目すべきは同方位の4棟が重複する古墳時代後期に属する竪穴住居跡である(写真18)。一辺4m前後に復元でき、一部には6mを測る大規模なものが含まれる可能性も残す。うち1棟からは輪羽口と鉄滓が出土しており、同一地点での複数回の建替えとともに、その性格を示唆する。

古代以降の主要遺構としては、東西方向の坪界線に合致する位置で検出した古代と中世の溝状遺構がある。古代の溝は幅・深さともに0.6mを測り、溝底が途中で盛り上がり、細長い土坑を1m内外の間隔で連結させたような形態を呈する。所属時期を示す遺物に恵まれないが、7・8世紀代に属するものと考えられる。中世の溝は幅2.4m、深さ0.5mを測る。



第11図 遺跡位置図 (1/25,000)



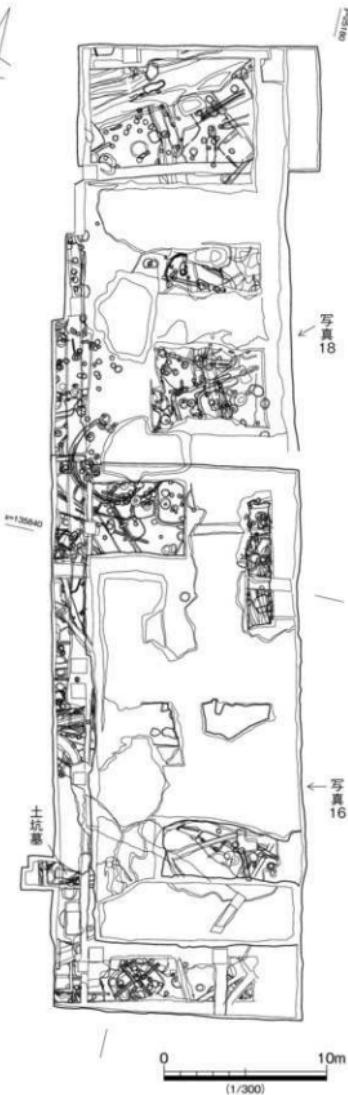
写真 16 調査区南半部全景（東から）



写真 17 土坑墓（西から）



写真 18 重複する竪穴住居跡（北東から）



第 12 図 旧練兵場遺跡

遺構配置図

いし だ こうこうこうていいいせいき 石田高校校庭内遺跡

県立石田高等学校堆肥舎建設に伴い、発掘調査を実施した。調査地は、現在学校の敷地で平地である。

過年度の調査では今回の調査地の西側及び南側には弥生時代の竪穴住居跡を検出しており、北側では古代から中世の溝状遺構や柱穴跡を検出している。今年度の調査では、弥生時代の竪穴住居跡が想定されたが、調査の結果、弥生時代の遺構は、弥生時代後期の土坑が1基検出されたのみで、遺構の時期では北側の調査地との関連が考えられる。

調査地西半は、北半が現代の建物の建築と解体工事に伴い、大きく搅乱されており遺構は残っていない。基盤層は粗砂層である。調査地東半の基盤層は粘質土である。

中心となる遺構は、7世紀代の遺物が出土する大型溝状遺構3条である。調査区のほぼ中央で、南東から北西方向と南北方向のものが検出されたが、現段階では時期の前後関係は明らかではない。また調査区西端でも溝状遺構を検出した。

その他の遺構としては、中世のものと考えられる石組みの井戸跡と考えられる遺構を検出した。井戸底面からは瓦器碗が出土した。

遺物として注目できるものとしては、弥生時代後期のものと考えられる銅鏡2点がある。いずれも7世紀代の大型溝状遺構の埋土から出土した。



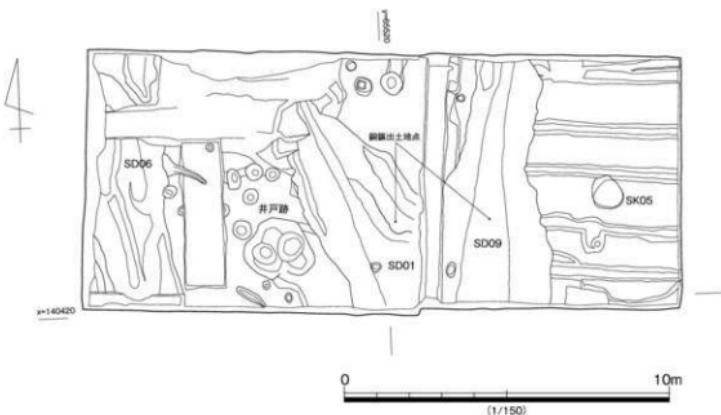
第13図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真19 調査区西半全景（南から）



写真20 調査区東半全景（南から）



第 14 図 石田高校校庭内遺跡 遺構配置図



写真 21 銅鏡出土状況

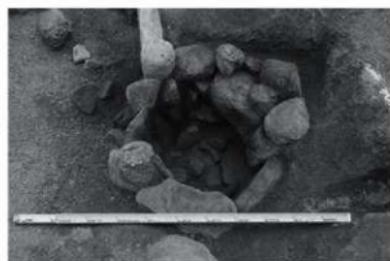


写真 22 井戸跡（南から）



写真 23 SK05（西から）

たひきたはらいせき 多肥北原遺跡

県道太田上町志度線道路改良工事に伴い、発掘調査を実施した。平成19・20年度に調査した多肥平塚遺跡の西側に位置する。当初は調査面積1,052m²の予定であったが、生涯学習・文化財課の試掘調査により当初予定地の西側にも遺跡の広がりが明らかになったため、追加して本発掘調査を実施することになり、全体の調査面積は2,086m²となつた。

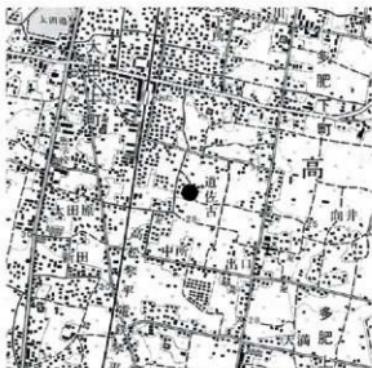
遺跡は、南から北へ若干傾斜気味の平地に立地する。調査地東端から中央では、基盤層は礫層が部分的に現れる黄灰色粘質土であるが、調査地西端付近では黄白色粗砂層が基盤層となっている。

遺構の内容は、大きく2つに分かれ、7世紀を中心とする堅穴住居跡群、掘立柱建物跡及び土坑と平安時代中頃の井戸跡、土坑である。遺構の検出状況は、調査対象地東半分で密度が高く、遺構検出面上の包含層からは多量の遺物が出土した。遺跡西半は、宅地跡で搅乱が著しいこともあるが、遺構の密度は希薄である。

7世紀を中心とする遺構は、調査地の東半分に集中して見られ、住居跡の重複が見られる。これは、礫層の現れていない基盤層を選んで、住居を建築した可能性がある。堅穴住居跡は全体的に深い掘り込みが良く残っており、竈煙道がトンネル状に残存しているものもあった。竈は北側に付くものが多いが、竈の袖の残存状況は総体的に良くない。また、住居廃絶時に竈の部分に土師器の壺を置いたと考えられる遺構と遺物を検出した。掘立柱建物跡については、柱穴跡と考えられる遺構は多いものの、建物跡として確認できたのは数棟に留まった。土坑はいわゆる廃棄土坑と考えられるものである。

平安時代中頃の遺構は、確実なものとしては井戸跡1、土坑1を確認した。井戸跡底面の四隅には柱穴跡状の掘り込みがあり、木組みの井戸枠の隅柱を設置したものと考えられる。土坑からは軟質の縁軸陶器が出土した。

出土遺物として注目できるものとして、後世の包含層から出土した7世紀頃と考えられる金属製の耳環がある。



第15図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真24 1区全景（東から）

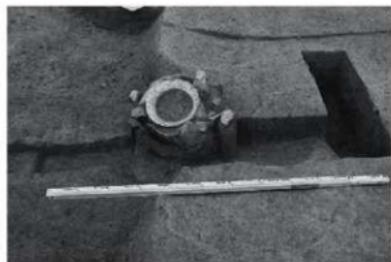


写真 25 SH01 窯出土土器（東から）

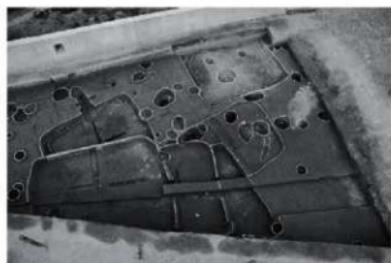


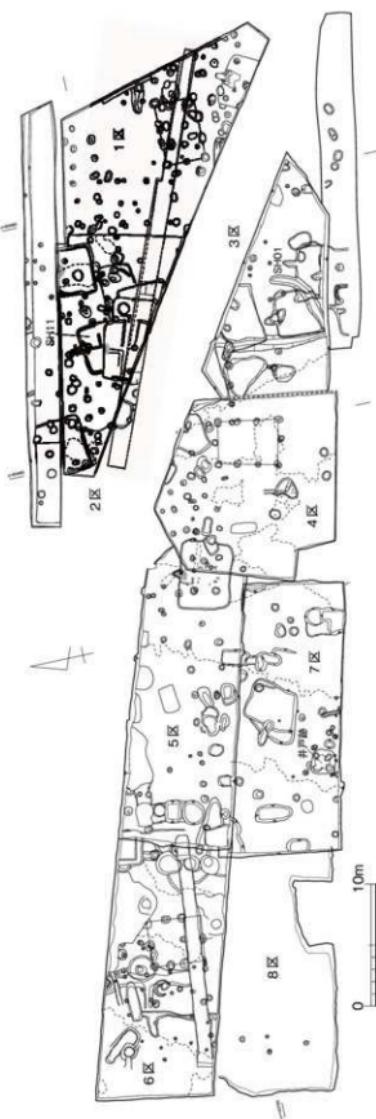
写真 26 2区全景（南から）



写真 27 SH11 窯（南から）



写真 28 井戸跡（南から）



第16図 多肥北原遺跡 遺構配置図

多肥北原西遺跡

県道太田上町志度線道路改良工事に伴い、発掘調査を実施した。多肥北原遺跡の西側に当る。生涯学習・文化財課の試掘調査により、多肥北原西遺跡は、全体で 4,898m²の調査面積であることが確認された。平成 21 年度は、このうち東端の 900 m²を対象として調査を実施した。

遺跡は、現在水田・宅地が広がる平地に立地する。調査地西半は基本的に黒色系粘質土が遺構突出面で、部分的に黄灰色粘質土となっている。黒色系粘質土は、深くなるに従い、黒色が薄れ灰白色粘質土へ変わっていく。調査地東端は、多肥北原遺跡と同様に、部分的に疊層が現れる黄灰色粘質土が基盤層となっている。

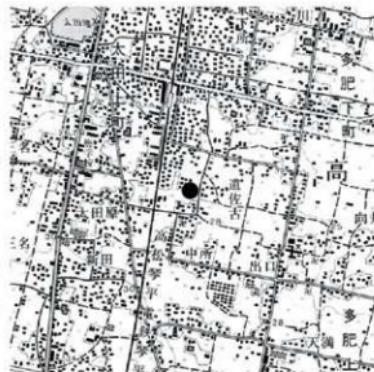
遺構は大きく 2 つ時期に分かれ、奈良時代前後と考えられる掘立柱建物跡、土坑及び性格不明な落ち込みと平安時代中頃のピットである。

調査地中央では、遺物を多量に出土する包含層及び性格不明の落ち込みを検出した。調査地東端及び西端は遺構密度は低いものの掘立柱建物跡が検出された。

奈良時代前後と考えられる遺構では、完形の土師器杯 5 点を埋納した土坑及び須恵器大甕が潰れた状況で出土した土坑がある。東端と西端で検出された掘立柱建物跡やピットの大半はこの時期と考えられる。

平安時代中頃のピットは、少数確認できたに留まる。

出土遺物として注目できるものとして、性格不明の落ち込みから出土した 7 世紀頃と考えられる金属製の耳環及びピットから出土した布目平瓦がある。



第 17 図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真 29 1 区掘立柱建物跡（南から）



写真 30 2 区全景（南から）

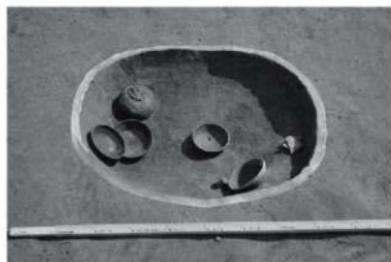


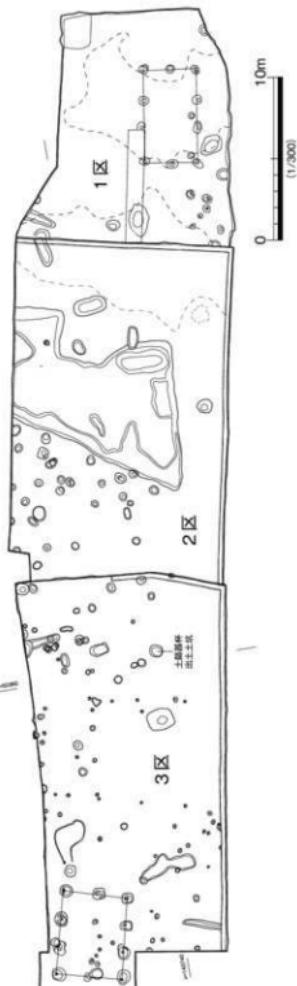
写真 31 土師器出土土坑（西から）



写真 32 3区全景（西から）



写真 33 3区掘立柱建物跡（西から）



第18図 多肥北原西遺跡 遺構配置図

2. 普及・啓発事業

1 展示

(1) 香川県埋蔵文化財センターでの展示

タイトル	場所	会期
遺跡・遺物からみた香川の歴史	第1展示室	4月1日～9月18日、 12月14日～3月31日
続・発掘へんろ～四国の旧石器・縄文時代～	第1展示室	10月3日～12月6日
知られざる善通寺市北部の遺跡群 ～小塚・稻木北・永井北遺跡～	第2展示室	4月1日～4月24日
内海と中世の遺跡 ～高松市本太中村遺跡・三豊市家の浦遺跡～	第2展示室	4月30日～7月3日
夏休み子どもミュージアム あ、古墳へ行ってみよう。	第2展示室	7月18日～8月31日
府中の古代遺跡	第2展示室	9月7日～12月14日
讃岐国府跡を探る 一平成21年度の調査一	第2展示室	1月14日～3月31日

第9表 展示一覧

一般			団体								合計		
大人	子ども	計	団体数				構成員数						
			一般	高校生	小・中学生	幼稚園	計	一般	高校生	小・中学生	幼稚園	計	
1,630	400	2,030	17	0	8	0	25	635	0	301	0	936	2,966

第10表 入館者数一覧

(2) 香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示

タイトル	場所	会期	観覧者数
高松城下から出土した陶磁器	栗林公園民芸館	4月1日～11月12日	48,921
大野原4大古墳の謎	観音寺市中央図書館	8月27日～9月13日	675
第6次さかいで古代探検隊 国府があったまち	坂出市郷土資料館	10月28日～11月29日	783
東かがわ市考古編 古代の東かがわ	東かがわ市歴史民俗資料館	12月13日～2月15日	186
シリーズ学校の遺跡2 ～鹿伏・中所遺跡～ 校舎の下の大弥生集落	香川県立文書館	1月19日～2月28日	1,396
弥生のうるし ～うるしと1800年前のムラー	高松市石の民俗資料館	2月20日～3月22日	1,333
四国地区埋蔵文化財センター巡回展 続・発掘へんろ	松山市考古館	4月17日～6月28日	4,241
～四国の旧石器・縄文時代～	高知県埋蔵文化財センター	7月27日～9月18日	1,417
	徳島県立埋蔵文化財総合センター	1月12日～3月7日	879
合計			59,831

第11表 センター外展示一覧

2 現地説明会・地元説明会

内容		実施日	対象	見学者数
1 津森位遺跡現地説明会		平成21年8月22日	一般	90
2 飯野・東二瓦窯遺跡現地説明会			一般	
3 西白方瓦谷遺跡地元説明会		平成21年11月22日	地元	70
4 讃岐国府跡地元説明会		平成22年1月16日	地元	60
5 讃岐国府跡現地説明会		平成22年2月21日	一般	138
6 旧練兵場遺跡現地説明会		平成22年2月28日	一般	173
合計				531

第12表 現地説明会・地元説明会一覧

3 講師の派遣

(1) 体験講座など

依頼者		実施日	場所	内容	対象	人数
1 RNC サービス		5月4・5日	さぬききどもの国	分銅形ベンダントづくり	子ども	180
2 香南小学校6年団		7月4日	ししまる館	勾玉づくり	親子	80
3 香南歴史民俗郷土館		7月26日	高松市香南歴史民俗郷土館	勾玉づくり	小学生	27
4 木太コミュニティセンター		7月30日	木太コミュニティセンター	勾玉づくり	小学生	28
5 前田コミュニティセンター		8月7日	前田コミュニティセンター	勾玉づくり	小学生	41
6 加茂町子ども会		8月12日	坂出市役所加茂出張所	分銅形ベンダントづくり	小学生	18
7 三豊市教育委員会		8月21日	宗吉かわらの里展示館	土器づくり	一般	23
8 香南歴史民俗郷土館		8月23日	高松市香南歴史民俗郷土館	分銅形ベンダントづくり	小学生	15
9 宇多津町教育委員会		8月24日	宇夫階神社	勾玉づくり	小学生	60
10 三豊市教育委員会		10月14日	宗吉かわらの里展示館	土器焼き	一般	30
11 コープ垂水運営委員会		11月18日	コープ飯山	ガラス玉づくり	一般	10
12 コープ垂水運営委員会		11月26日	コープ飯山	ガラス玉づくり	一般	15
13 コープ飯山南運営委員会		2月2日	コープ飯山	勾玉づくり	一般	12
14 香南歴史民俗郷土館		2月13日	高松市香南歴史民俗郷土館	ガラス玉づくり	親子・一般	14
15 高松市石の民俗資料館		2月20日	高松市石の民俗資料館	うるしのコースターブル	親子・一般	27
16 亀阜地区民生委員児童委員協議会		2月20日	亀阜小学校	勾玉づくり	小学生	32
合計						612

第13表 体験講座への講師派遣一覧

(2) 学校

	学校名	実施日	内容	対象	人数
1	高松市立国分寺北部小学校	6月18日	クラブ活動講師	4～6年生	32
2	観音寺市立常磐小学校	6月23日	勾玉づくり	6年生	68
3	高松市立国分寺北部小学校	6月25日	クラブ活動講師	4～6年生	32
4	高松市立前田小学校	7月3日	土器づくり	6年生	39
5	高松市立屋島西小学校	9月7日	製塙土器づくり（整形）	6年生	104
6	高松市立前田小学校	10月16日	土器焼き	6年生	39
7	高松市立屋島西小学校	11月9日	製塙土器づくり（焼成）	6年生	104
8	高松市立屋島西小学校	12月2日	塙づくり	6年生	104
合計					522

第14表 学校への講師派遣一覧

(3) その他

	依頼者	実施日	内容
1	香川歴史学会	4月11日	講演
2	さぬき市文化財保護協会 長尾支部	4月29日	講演
3	丸亀郷土史学習クラブ	5月9日	講演
4	まんのう町文化財保護協会	5月23日	講演
5	宇多津町文化財保護協会	6月1日	講演
6	香川県神社庁	7月4日	講演
7	徳島市立考古館	7月25日	講演
8	香川歴史学会	7月25日	講演
9	丸亀郷土史学習クラブ	10月10日	講演
10	香川県文化財保護協会 坂出支部庁	11月8日	講演
11	坂出市府中老人クラブ連合会	11月12日	講演
12	高松市教育委員会	11月28日	講演
13	高松市立屋島小学校	12月10日	研究発表への指導
14	文化財・博物館関係労組連絡会	1月23日	講演
15	三豊市立吉津小学校 PTA	1月24日	窯づくりの指導
16	徳島県埋蔵文化財センター	2月14日	講演
17	高松市円庭地区老人クラブ連合会	3月10日	遺跡解説
18	普通寺市教育委員会	3月24日	講演

第15表 講演等への講師派遣一覧

4 坂出市立府中小学校との連携授業（よろこび学習）

回	実施日	場所	内容	対象	人数
1	4月17日	埋蔵文化財センター	施設見学	6年生	40
2	5月15日	讃岐国府跡周辺	遺跡見学	6年生	40
3	6月5日	府中小学校	授業（旧石器～縄文）	6年生	40
4	6月12日	府中小学校	授業（弥生）	6年生	40
5	6月19日	府中小学校、新宮古墳	授業（府中の遺跡）	6年生	40
6	7月10日	府中小学校	土器づくり	6年生	40
7	10月9日	府中小学校	土器焼き	6年生	40
8	10月30日	府中小学校	土器炊飯	6年生	40
9	12月17日	讃岐国府跡	発掘体験	6年生	41
合計					361

第16表 坂出市立府中小学校との連携事業一覧

5 夏休み子どもミュージアム

7月18日～8月31日に夏休み子どもミュージアムを行った。第2展示室で展示「あ、古墳へ行ってみよう。」を開催し、専門職員が考古学に関する自由研究の相談に応じる「遺跡の自由研究サポートデスク」のコーナーを設けた。また、8月18日には発掘体験学習「夏休み！土器ドキ発掘体験！」を津森位遺跡で開催し、25名の方が参加した。

6 考古学講座

専門職員が講師を務める考古学講座を4回開催した。

回	実施日	タイトル	講師	人数
1	10月10日	石に魅せられた狩人たち～四国の旧石器時代～	森下英治	17
2	11月8日	儀礼のかたち～讃岐の埴輪～	藏本晋司	16
3	2月6日	地名が語る讃岐国府跡～讃岐国府跡を探る①～	松本和彦	50
4	2月27日	讃岐国府跡周辺の地形と景観～讃岐国府跡を探る②～	木下晴一	42
合計				125

第17表 考古学講座一覧

7 文化ボランティア活動

文化ボランティアは、事業の記録撮影や普及事業の補助等を行った。16名が登録し、33回、延べ79名が活動に参加した。

8 四国新聞への連載

四国新聞に「古からのメッセージ さぬき歴史教室⑦」として、計48回の連載を行った。県

内の代表的な考古資料を紹介する内容（24回）に加え、「道真の足跡を追う（讃岐国府跡探索事業から）」（13回）、「香川の弥生時代研究最前線—旧練兵場遺跡の調査から」（11回）で構成した。

9 資料の貸出・利用

区分	学校・大学	研究会・同好会	教育委員会・博物館	出版社・新聞社	個人・他	合計
遺物	3	1	12	0	20	36
写真・パネル	0	0	4	3	3	10
レプリカ・模型	0	0	1	0	0	1
合計	3	1	17	3	23	47

第18表 資料貸出・利用一覧（数字は件数）

10 職場体験学習・インターンシップ

	学校名	期間	内容	人数
1	高松市立塩江中学校	6月29日～7月1日	職場体験学習	4
2	坂出市立瀬居中学校	8月3日～5日	職場体験学習	1
3	香川大学	9月24日～30日	インターンシップ	3
4	高松市立香東中学校	9月28日～10月2日	職場体験学習	6
5	丸亀市立綾歌中学校	11月5日～6日	職場体験学習	8
6	坂出市立坂出中学校	12月1日～3日	職場体験学習	3
7	坂出市立白峰中学校	12月8日～10日	職場体験学習	3
合計				28

第19表 職場体験学習・インターンシップ一覧

11 刊行物

- (1)『香川県埋蔵文化財センター年報 平成20年度』
- (2)『香川県埋蔵文化財センター研究紀要VI』
 - ・信里芳紀「香川の絵画・記号土器」
 - ・森下友子「近世の富田焼II—平尾窯跡出土遺物一について」
 - ・乗松真也「大正期における綾歌郡府中村の史跡調査—史蹟名勝天然紀念物保存法施行に伴う一地方自治体の対応—」
- (3)『いにしえの讃岐』 62～65号

12 ホームページ

ホームページ(<http://www.pref.kagawa.lg.jp.maibun/>)の更新を随時行った。

トップページページビュー数 17,398

3. 緊急雇用創出基金事業

直接雇用の形態による「学校及び地域等における出土品の活用推進事業」と、委託の形態による「埋蔵文化財資料のデジタル化推進事業」を実施した。

1 学校及び地域等における出土品の活用推進事業

埋蔵文化財センター保管の出土品のうち、発掘調査終了後相当の年数が経過しているものについて、分類、接合、復元、実測、写真撮影等の作業を行うことで、学校等への貸出しや展示等の活用に供することができるような措置を講じた。

作業の対象は、「讃岐国府跡探索事業」を開始したことに関連付けて、昭和 52 年度から昭和 56 年度まで香川県教育委員会によって発掘調査が実施された、讃岐国府跡の出土品とした。

作業の期間は、平成 21 年 6 月 8 日から 11 月 30 日まで、雇用した臨時職員の員数は、5 名である。



写真 34 写真撮影した出土品



写真 35 出土品の接合作業

2 埋蔵文化財資料のデジタル化推進事業

この事業は、埋蔵文化財発掘調査において撮影された遺跡の記録写真をデジタル化して、その保存性を高めるとともに、埋蔵文化財資料データベース検索システムの構築を目指した事業である。

業務内容としては、二つに分けられる。

最初に行う業務は、写真データのデジタル化の業務である。対象となる遺跡の記録写真の中から適性な写真を選択して、その写真をスキャニング、色調補正を経たデータをDVD-ROM等へ保存する業務である。

デジタル化の対象となる写真は、センター設立前の昭和40代から設立直後の昭和63頃に撮影されたスライドの中で、劣化が進んだ43遺跡の記録写真を優先してデジタル化を実施した。最終的にはデジタル化した写真は22,494カットを数える。

次に行う業務は、WEBを通じて、その情報を広く一般に公開するため、WEB公開を前提とした検索システムを構築する業務である。今回の事業でデジタル化したデータや、以前にデジタル化したデータもこの検索システムに入れた。

実施に当たっては、専門業者と委託契約を結び、平成21年9月から開始して、平成22年3月までの期間で実施した。



写真36 写真の選択作業



写真37 写真のスキャニング作業

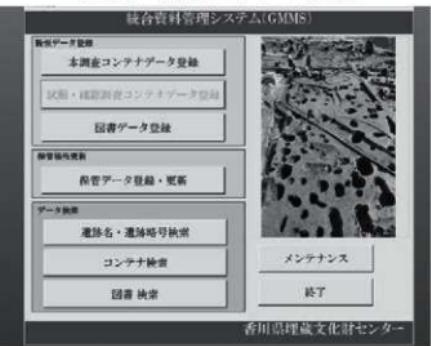


写真38 資料管理システムのトップ画面

4. 讀岐国府跡探索事業

香川県は、平成 20 年 10 月に平成 24 年度までの「香川県文化芸術振興計画」を策定した。

この中で、「讀岐国府跡探索事業」は、「香川の特色ある文化芸術活動を活かした地域づくり」を目的とした「地域文化活性化事業」として、戦略的重點事業に位置付けられた。

この事業の趣旨は、ボランティアとともに地名調査、地形調査、発掘調査等を行うことにより、讀岐国府の所在地を特定して遺跡の実態を解明するとともに、遺跡を活用して地域の活性化を図ろうとすることである。

香川県埋蔵文化財センターでは、平成 21 年度から 4 カ年計画で同事業を開始した。

事業は、4 月にボランティア調査員を公募し、5 月 28 日に第 1 回ボランティア調査員研修会を開催することから着手した。

地名調査及び地形調査等については、6 月から 11 月まで実施し、国府関連の通称地名の収集や、国府遺構の存在が想定される微地形の復元等を行うことができた。

発掘調査は 12 月から平成 22 年 2 月まで屋外作業を行い、濃密な遺構、遺物の包蔵地を確認した。また、発掘調査の基礎資料とするために、関連資料の収集活動を行った。

遺跡を活用した普及・広報活動等については、調査の進捗に合わせて随時実施した。以下に実績を示す。

①ボランティア活動

登録者数 31 人

活動参加延べ人数 940 人

②地域との交流

説明会・学習会 6 月 16 日、7 月 28 日、9 月 28 日、11 月 12 日、11 月 26 日
170 人

展示「水のフェスティバル in 府中湖～むかし国府があった～」

10 月 4 日 8,000 人

府中小学校連携事業・発掘体験学習 12 月 17 日 41 人

発掘調査地元説明会 1 月 16 日 60 人

③情報発信

ホームページへの記事掲載 60 回

情報誌「いにしえの讀岐」への記事掲載 4 回

新聞への連載記事掲載 13 回

地元ケーブルテレビガイドブックへの記事掲載 5 回

④関連行事

展示「府中の古代遺跡」	9月7日～12月14日	938人
まち歩き「古代の県庁「国府」はどこ？ 遺跡の専門家と歩く1300年前—」	12月5・13日	20人
展示「讃岐国府を探る—平成21年度の調査—」	1月14日～3月31日	448人
県庁ギャラリー展「讃岐国府ミステリーハンター奮闘記」	1月25～29日	不詳
考古学講座「地名が語る讃岐国府跡—讃岐国府跡を探る①—」	2月6日	50人
考古学講座「讃岐国府跡周辺の地形と景観—讃岐国府跡を探る②—」	2月27日	42人
発掘調査現地説明会	2月21日	138人
報告会「古代の県庁・国府を探る」	3月13日	105人

⑤刊行物

冊子「讃岐国府跡を探る」	1,200部
パンフレット「讃岐国府を探る」	25,000部

III 讃岐国府跡探索事業に伴う調査報告

第1節 調査の経過

1. 調査の経過

本稿は、讃岐国府跡探索事業に伴う地名調査、地形調査、発掘調査等の各種調査の概要である。

調査は、地名調査を松本和彦、地形調査を木下晴一、発掘調査及び関連調査を藏本晋司がそれぞれ分担した。本稿の執筆も各担当が分担し、文末に執筆者名を記し、編集は藏本が行った。

「讃岐国府跡探索事業」は、平成21年4月にボランティア調査員（通称「讃岐国府ミステリーハンターJ」）を公募することから開始した。登録者数は31名である。

5月中に各種調査の準備を整え、5月24日に第1回ボランティア調査員研修会を開催して、6月から地名調査と地形調査に着手した。

なお、ボランティア調査員の資質向上や、調査情報の共有化等を目的とした研修会は、1年間で7回開催した。

地名調査は平成21年6月1日から開始し、10月までの5ヶ月間実施した。6月はほぼ毎日調査を行ったが、酷暑の影響もあり、7・8月は活動日を水または木曜日と、土または日曜日の週2日に限定し、9・10月からは水・木・土曜日の週3日間の調査を実施した。延調査日数は43日、ボランティア調査員の調査への総参加人数は88名を数える。

地形調査も6月1日から開始し、11月までの6ヶ月間実施した。6月はほぼ毎日、7月以降は水・土曜日の週2日間実施した。延調査日数は41日、ボランティア調査員の総参加数は約250名である。

発掘調査地の選定は、地名・地形調査の成果等とともに、センター内で慎重に検討が繰り返され、候補地が決定したのは11月中旬のことであった。調査地は民地のため補償の手続きを行い、地権者の快諾を得て、11月末にはすべての準備を終えた。

発掘調査は、平成21年12月4日より開始した。現耕作土のみ重機によって掘削し、包含層及び遺構埋土は、すべて人力により掘り下げた。発掘はボランティア調査員が主に担当し、平成22年2月25日に無事終了した。延調査日数は51日、ボランティア調査員の調査への総参加人数は約250名である。

発掘調査期間中には、坂出市立府中小学校6年生児

童や「09でくてくさみき」参加者の発掘体験、坂出市立白峰中学校2年生生徒の職場体験、県立坂出高校地歴部生徒の現場見学等も合わせて実施した。こうした活動は、新聞・テレビ等のマスコミに取り上げられ、特集番組が組まれる等注目された。こうしたこともあり、1月16日の府中地区住民を対象とした地元説明会には60名、2月21日の現地説明会には138名もの参加者があり、メモを取り調査員に熱心に質問する参加者も多く見られ、関心の高さが窺われた。

本稿挿図中の座標は、国土座標第IV系（世界測地系）で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。

遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1994年度版』による。

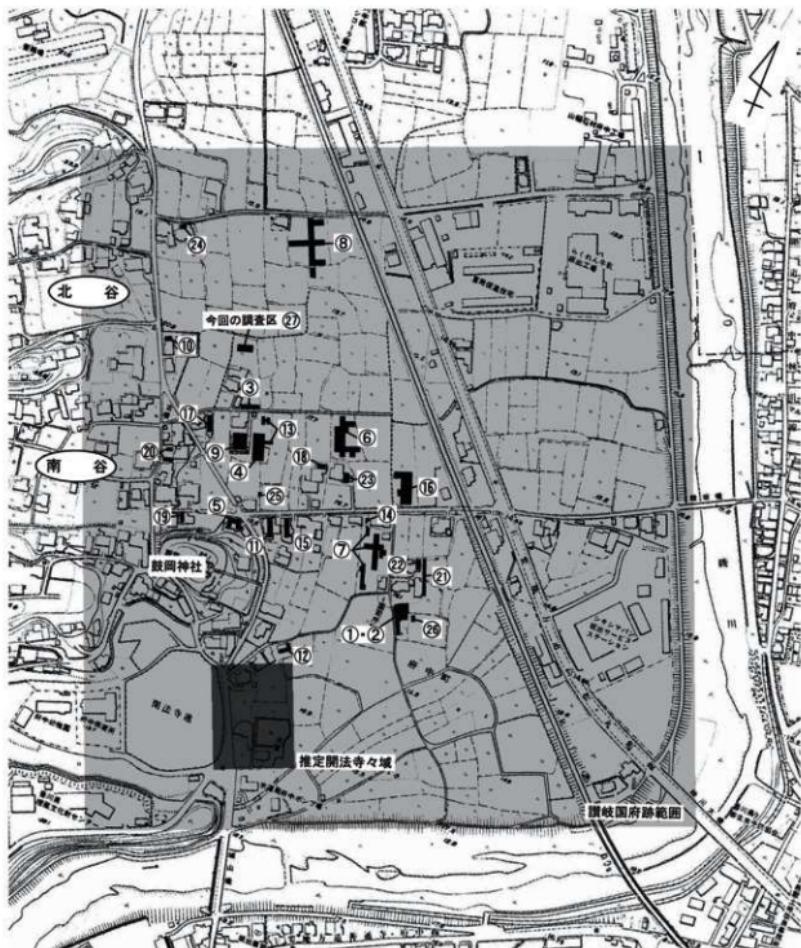
なお、調査に当り、調査地の地権者の方を始め、坂出市教育委員会、地元自治会、地元水利組合等、多くの方のご助力を得た。記して謝意を表したい。

2. 既往の調査

周知の埋蔵文化財包蔵地としての讃岐国府跡は、坂出市府中町本村地区の東西約600m、南北約700mのエリアが指定されている。この範囲には、白鳳期創建の古代寺院開法寺跡を含む。開法寺跡の寺域については確定していないが、坂出市教育委員会（以下、市教委と略す）の調査により、塔・講堂・僧坊・回廊等の遺構が確認され、方1町程度が想定されている。

讃岐国府跡に対する発掘調査は、昭和51年度の市教委による調査を嚆矢として、香川県教育委員会（以下、県教委と略す）による学術調査や、市教委による開発に伴う事前調査が実施されてきた。これまで個々の調査地の呼称に統一性はなく、例えば「○年度の○番地の調査区」等と漫然と表記してきた。今回の調査を契機として、こうした煩雑な名称を改め、「第○次調査」と通し番号を付した名称を与えることとする。

具体的な調査位置は、第1図に示したとおりであり、各調査区の概要については、表1にまとめた。上述したとおり、開法寺跡の想定寺域範囲を除いた部分を讃岐国府跡とし、讃岐国府跡として市教委により実施された寺域内の調査は、国府に関係すると思われる遺



第19図 謂岐国府跡調査区位置図

構が確認されていないこともあります。除外した。なお、表作成に当たり、市教委より教示を得た。(叢書)

という利点を活かして石造物調査も実施した。

聞き取り調査は地域住民から小字名、通称地名、伝承、慣習、屋号等を聞き取ることを目的とし、調査項目を網羅したカードを作成し、それに記載する方法を取った。当初、調査範囲は坂出市府中町と加茂町南部を対象として実施する予定であったが、時間的制約等もあり、府中町本村地区が調査の中心となった。

第2節 地名調査の成果

地名調査はボランティア調査員が主となり、聞き取り調査と文献資料の調査の2本立てで行い、悉皆調査

番号	調査年度	調査次	調査主体	調査内容	主な遺物内容	主な遺物内容	文獻
1.	昭和51年度	第1次調査	市教育委	約200m	平安時代後半～鎌倉時代の土坑・溝・柱穴・井戸など 平安時代後半～近世の柱穴・土坑・井戸・溝状遺構など	土陶器、須恵器、黒色土器、鉢形陶器片など	香川県 1982
2.	昭和52年度	第2次調査	市教育委	13世紀	古代の柱穴、11～12世紀の溝状遺構 13世紀の柱穴、15～16世紀の柱穴・溝状遺構、17世紀の掘立柱建物・土坑・溝状遺構など	土陶器、須恵器、黒色土器、鉢形陶器片、輪郭など 瓦質土器底盤、瓦器、瓦筒、瓦器、瓦筒、瓦片、瓦、瓦、瓦片	香川県 1982
3.	昭和53年度	第3次調査	市教育委	13世紀	7世紀後半の溝状遺構、7世紀後半～平安時代末の溝状建物 7世紀後半の溝状遺構、7世紀後半～平安時代末の溝状建物	瓦質土器底盤など 瓦質土器、瓦器、瓦筒、瓦器、瓦筒	香川県 1982
4.		第4次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	香川県 1982
5.		第5次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	香川県 1982
6.	昭和54年度	第6次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構 平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構	瓦質土器底盤、瓦器、瓦筒、瓦器、瓦筒	香川県 1982
7.	昭和55年度	第7次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	香川県 1982
8.	昭和56年度	第8次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	香川県 1982
9.	昭和59年度	第9次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	香川県 1982
10.	昭和63年度	第10次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構 平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	坂出市 1993
11.	昭和63年度	第11次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	坂出市 1993
12.	平成3年度	第12次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構	瓦質土器底盤など	坂出市 1993
13.	平成3年度	第13次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構	瓦質土器底盤など	坂出市 1992
14.		第14次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構	瓦質土器底盤など	坂出市 1992
15.		第15次調査	市教育委	13世紀	平安時代末から13世紀初頭の柱穴・溝状遺構 平安時代末から13世紀初頭の柱穴・溝状遺構	瓦質土器底盤など	坂出市 1992
16.	平成4年度	第16次調査	市教育委	13世紀	12世紀後半から13世紀にかけての溝状建物・土坑・溝 12世紀後半から13世紀にかけての溝状建物・土坑・溝	瓦質土器底盤、瓦器、瓦筒、瓦器、瓦筒、瓦器、瓦筒	坂出市 1993
17.	平成6年度	第17次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	坂出市 1995
18.		第18次調査	市教育委	13世紀	7世紀後半の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	坂出市 1995
19.		第19次調査	市教育委	13世紀	木桶井・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	坂出市 1995
20.		第20次調査	市教育委	13世紀	平安時代末～平安時代中期の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	坂出市 1996
21.	平成7年度	第21次調査	市教育委	13世紀	古代の柱穴・溝状遺構、中世の柱穴など	瓦質土器底盤など	坂出市 1996
22.	平成11年度	第22次調査	市教育委	13世紀	10世紀末の柱穴・溝状遺構、12世紀後半の柱穴・溝状遺構など	瓦質土器底盤など	坂出市 2002
23.	平成13年度	第23次調査	市教育委	13世紀	12世紀後半の柱穴・溝状遺構	瓦質土器底盤など	坂出市 2003
24.	平成15年度	第24次調査	市教育委	13世紀	包含層	瓦質土器底盤など	坂出市 2004
25.	平成16年度	第25次調査	市教育委	13世紀	なし	瓦質土器底盤など	坂出市 2005
26.	平成19年度	第26次調査	市教育委	13世紀	11世紀はじめの柱穴・溝状遺構・集石遺構など	瓦質土器底盤など	坂出市 2008
27.	平成21年度	第27次調査	財センター	13世紀	11世紀後半の柱穴・溝状遺構・集石遺構など	瓦質土器底盤など	本稿

(左端番号は第19回の番号と一致する)

第20表 謙岐国府跡調査区一覧表

調査の結果、坂出市府中町本村地区において讃岐国府や崇徳上皇に関連する地名と由来を採集することができ（第20図）、従前の指摘どおり本村周辺に国府が所在する可能性が高いことを確認した。一方、採集地名の多くが明治～大正期に採集された地名である点には留意すべきである。調査では、「ここには崇徳さんがおって、これは崇徳さんが使っていた井戸や」、「ここは讃岐国府の○○があった場所や」という表現で地名を語る地域住民が多く、採集地名の大多数が明治～大正期における讃岐国府跡や崇徳上皇の顯彰活動、戦後の地域教育等により、府中町本村に讃岐国府が所在したという認識や、鼓岡に崇徳上皇が居住していたという認識に基づき伝承されてきた地名と判断でき、何らかの検証を行わなければ、国府を考える素材とはなり得ないことを示唆する。

一方、宅地や田一筆ごとの通称地名は使用されていない場合が多く、採集地名は二十数例に留まる。採集地名は形状や規模に由来するオゼマチ、サンセモン、所在地に由来するヨツカド、セド、旧状を示唆するイモジ等がある。その他の地名として、土地の起伏を示す地名がある。ミナミガラ、ヒガシガラ、クボ、クボチはいずれも綾川沿いの段丘崖下に広がる低地を呼称した地名で、南川原、東川原、窪（久保）、窪地（窪内）という文字が推測できる。また、字は府中町では500m四方程度の広がりを有する地域共同体の単位としての大字のみが用いられ（本村上所、本村下所、本村中所、北谷、南谷、西山、石井、新宮、綾坂）、他地域で見られる1町ごとといった比較的狭く、限定的な範囲を呼称した小字に相当するものは採集できない。

文献資料の調査はボランティア調査員の自主的調査活動とした。当初は「菅家文草」等の活字化された資料からの古地名抽出を行ったが、江戸期の検地帳（『阿野郡南府中村田畠順道帳』、以下検地帳と呼ぶ）が確認された以降は、その解説と分析を主とした。ここでは、江戸時代の検地帳について報告したい。

検地帳には田一筆ごとの等級、規模、所有者、水掛に加え、各田の通称地名も明記される。年号表記から文化2(1805)年の改検地に伴って作成され、その後継続的に修正加筆されたものと考えられ、記載地名の大多数は文化2年に遺存ないし使用されていたものと判断できる。採集地名と比較すると、今回の聞き取り調査の採集地名として、まとは、南川原、窪、藏ノ前、天神、帳羅、大町、池田、窪内、あんたい、池尻、高

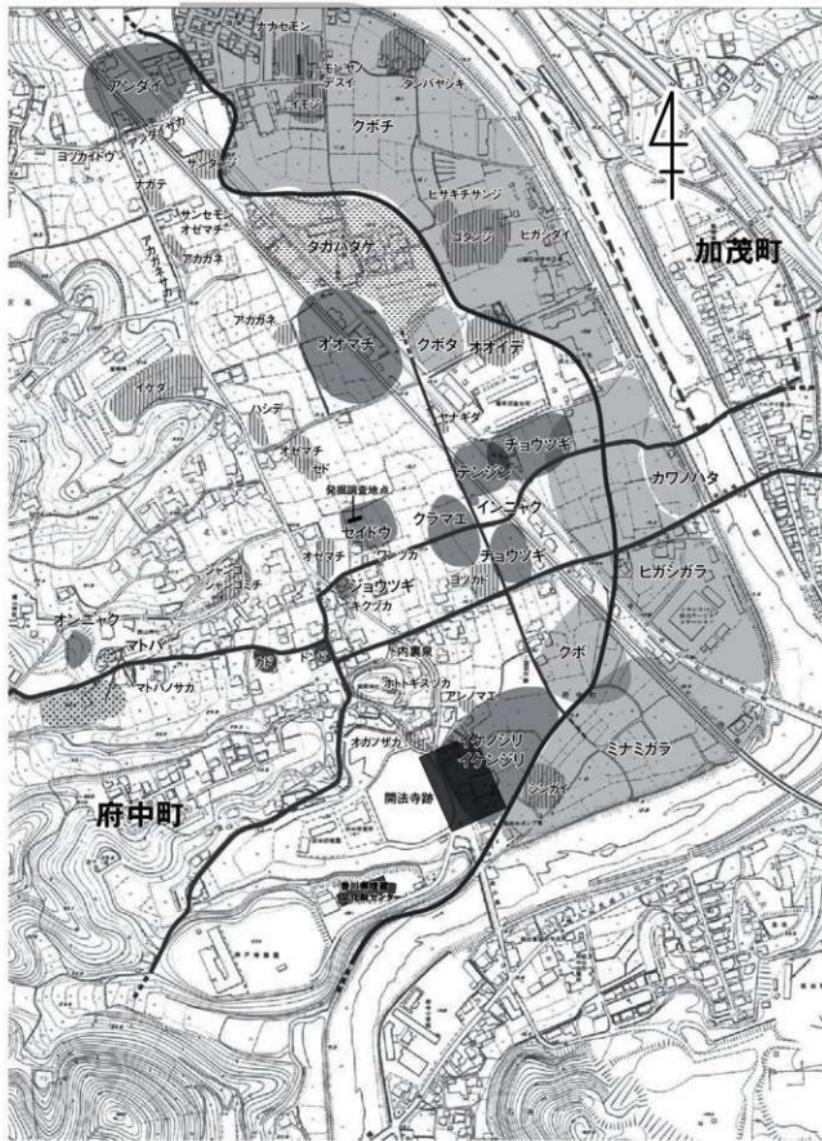
畑、過去の調査の採集地名として、かきの内、百分、新規確認地名として、かくち、正佛等が検地帳に記載を認める。一方、採集地名にも係わらず検地帳に記載が認められない地名として、インニヤク（印鑑）、ジョウツギ（状次）、ショウソウ（正懃・正倉）、セイドウ（聖堂）、セイリュウ（青竜）がある。検地帳の記載地名は田一筆ごとの通称地名や小字の性格を有する地名であるが、これら5地名はこうした性格とは異なる地名ないし文化2年以降に発生した地名と考えられる。

次に聞き取り調査と文献資料の調査成果を踏まえ、地名調査の成果をまとめるが、紙幅の都合上、倉と国府関連に言及する。前者として注目すべきは、国府の印章とそれをおさめた印額の鍵に由来するインニヤク地名である。検地帳に記載はないが、江戸末期の『讃岐国名勝団会』に印鑑表記がみられ、同書著者が正徳5(1715)年の『城山神社記』の除若表記を印鑑へと表記変化させたのが、印鑑表記の初出となる。その真偽は明らかではないが、聞き取り調査ではその隣接地にクラマエ地名が採集でき、検地帳でも同地点付近に藏ノ前、藏西添、藏北添という表記を認め、インニヤク・クラマエ地名周辺に官庫や国印の管理施設等が所在した可能性は高い。

さらに、その西側にセイドウ地名が所在する。聖堂という字をあて、孔子を祀った堂が所在した場所と伝承される。各地の国府でも郡司の子弟を教育する国学のうち、象徴的な建物である孔子廟に由来した地名がみられ、「菅家文草」にも登場するが、セイドウ地名が孔子廟に由来するかは不明である。注目すべきは、セイドウ地名に隣接したセドという田の通称地名である。セイドウが短縮した形ないし背戸という字に由来した通称地名と考えられ、前者であればセイドウの範囲は100mを上回る大規模なもの、後者であれば何らかの施設の裏手と推測できる。さらに、セイドウは聖堂のほか、正堂、政堂、正道等の字が推測でき、正堂や政堂であれば国印との関連が指摘できる。

以上、地名調査からインニヤク・クラマエ・セイドウ地名が展開する南北100m、東西200mの範囲は、国印や官庫が所在する可能性が高い等、讃岐国府の中で最重要地点となるが、前述したように地名の限界性もあり、採集地名の検証作業とともに、文献資料の悉皆的な調査等による追証と修正が今後の課題となる。

（松本）



第20図 府中町本村周辺の地名分布図

第3節 地形調査の成果

地形調査の活動内容は、綾川下流域の平野の微地形・水利・地割等の地理的情報の収集を行い、讃岐国府との関連を検討しようとするもので、今年度は府中町と加茂町を主たるフィールドに調査活動を行った。以下に、今年度の調査内容と今後の課題について述べる。

地形に関する調査としては、既往の研究成果の検討、空中写真判読の他、明治前期地籍図に記される地目と地位等級の分析、府中町本村地区においては水田一筆ごとの標高の測量、現地踏査等を行った。

香川県内における明治前期の地籍図は、地租改正地引絵図が村ごとに書式が異なっており、また、未完成のものが多いため、最初に作成された壬申地券地引絵図が統一して利用できるものである。調査対象地の明治地籍図の保存状況は不明であったが、今回の調査によって坂出市役所の出張所に大半が保管されていることがわかった。

明治前期地籍図は、小径や用水路、水利施設の名称等が記されているものがあり、地割の形状等とともに歴史資料として貴重な情報を提供してくれる。しかし、今回の調査対象地の地籍図には、文字史料としての情報は少なかった。このほか地籍図に記される田や畠等の地目と上中下等の地位等級に着目して分析を行った。田の地位等級は単位面積当たりの収穫量の多寡に基づいているが、その差は乾田と湿田の差による可能性が考えられる。乾田は微高地、湿田は旧河道に対応する可能性があるから、地目と地位等級の分布図を作成すれば、微地形が浮かび上がる可能性があるわけである。ただし、この手法が有効であるかどうか十分な検証を経ているわけではないため、他の手法による検討結果と合わせて検討する必要がある。

地目と地位等級分析図は、加茂町と林田町について行い、国府跡が所在する可能性の高い府中町本村地区では、壬申地券地引絵図が遺存していないため、明治20年代に作成された地押調査更正地図で代替した。加茂町と林田町の他の手法による分析が進んでいないため、分析結果の検証を今後進める必要がある。

次に、府中町本村地区について、水田一筆ごとの標高の測量と用水の取排水状況の調査を行った。水田は、用水の取排水に順応するため、宅地のように局的に盛り土をしたり、地下げをしたりする可能性は低く、元の地形に従順に造成されていると考えられる。測

量は、当初はGPSによる簡便な方式を考えていたが、オートレベルによる測量となった。

測量データは、20cmごとにグレーデーション状に配色して表現した。この結果、綾川に沿う段丘崖と段丘崖下の氾濫原面、段丘崖上の段丘面を把握することができた（これは地籍図の分析でも把握することができた）。氾濫原面は綾川の上流から下流に傾斜する地形面で、段丘面は城山の山麓で、城山から綾川に傾斜する地形面である。堆積物の十分な観察ができていないため推定の域を出ないが、氾濫原面は砂礫からなる綾川の堆積物、段丘面は城山から崩落した堆積物が2次堆積して形成されていると考えられる。なお、標高の配色を変えて、広範囲に平坦地を造成しているような痕跡の抽出を試みたが、今のところ成果は上がっていない。

水利調査は、一筆ごとの取排水状況の調査と、広域な水利状況の調査を行った。府中町本村地区は、南南西約2kmに所在する四手池からの灌漑用水によっているが、用水路については大きな特徴がある。それは、丘陵斜面の岩盤を穿って水路を設けていたり、丘陵を開析する谷を大きく迂回したりして用水を引いている等、たいへん無理をして用水を引いている点である。また、経路上のため池や溪流も用水に取り込んでいることも特徴である。四手池用水の在り方は、綾川の用水体系との関係も含めて、当地域の開発の歴史を解く糸口になるものとして注目される。

水田一筆ごとの取排水状況の調査は、休耕田を除く現況についての調査を行い、今後、水利慣行等の聞き取り調査を行う予定である。取排水状況について、特に注目されるのは、東西方向の幹線水路が取水には使用されず排水に利用される傾向のあることである。これは、当初は適当な深さに掘削されていた水路が、東側の氾濫原面（一段低い地形面）が形成された結果、開析されたため取水に不向きとなってしまったことが推定できる。氾濫原面の形成年代を知る資料が乏しい中で、古代末に氾濫原面が形成されたとする他地域の事例との関連を考える上で貴重な知見である。

以上の調査では、氾濫原面や段丘面といった地形面を抽出することができたが、一部を除いて氾濫原面や段丘面上の微高地や旧河道等の微地形を抽出することはできなかった。なお、これまでの調査成果と国府跡探索との関連であるが、綾川に沿う段丘崖の形成年代が主要な論点となる。推定通りに古代末に氾濫原面が



地籍図の調査



地籍図の調査

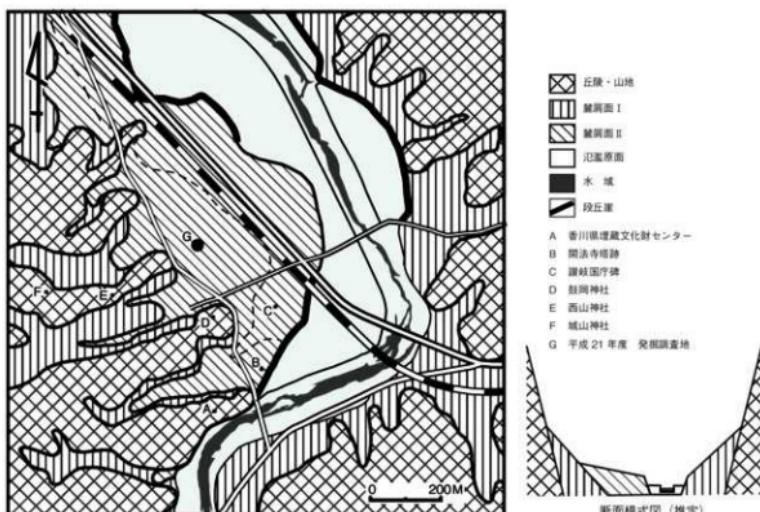


地籍図の分析



現地踏査

写真 39 ミステリーハンター（ボランティア調査員）による調査風景



第 21 図 地形分類予察図

形成されたとすると国府の存続期に大きな地形変化があったことになる。菅原道真の漢詩の自註に記されるように開法寺の東に府衙が存在したとすると、部分的に破壊されたり、移転したりしている可能性もある。

この他、綾川下流域平野に広範に広がる条里型地割、府中町本村地区の条里型地割と関連する地割の検討にも着手しているが、検討途上である。(木下)

第4節 発掘調査の成果

1. 概要と基本層序

今年度の調査区は、第3次調査区の北約60mの位置にあり、現在田畠として使用されている。現在の地番は、府中町5185番地である。現地表面の標高17.55m、緩やかに東に下る緩斜面の稜線よりやや北に偏した、斜面部に位置する。今年度は、東西15m、南北3mの調査区を設定し、調査を行った。調査地南側は宅地が迫っており、視野は限られるが、古代にあっては開法寺跡を眺望可能な位置にある。なお、本書の遺構名は、調査時のものをそのまま使用した。今後作成予定の本報告において、統一的な名称に改める予定である。

基本層序は、調査区北・東・西壁面において確認した(第22図)。現耕作土(1層)・床土層(2・3層)の下位0.3~0.4mにおいて概ね水平堆積する各遺物包含層は、淘汰されたシルト~砂層を基本とし、マンガンや鉄分の沈着が連続して認められること、出土する遺物が小片化していること等から、いずれも水田等の作土として利用されていた可能性が想定される。しかし、後述するSZ01・02を除いて明確な畦畔等の区画施設は確認されなかった。

さて、上述した床土層下に堆積する4・5層は、調査区東半部において確認された近世水田面(SZ01)を構成する堆積層である。またSZ01西側では、それ以前に遡る土坑(SK01)と溝状遺構(SD01)を検出している。これらを第1遺構面とする。

第1遺構面のベース層(7・8層)は、中世後半期までの土器等を多量に含む包含層(包含層I・II)である。本層下面で、柱穴跡、土坑等の遺構を確認し、第2遺構面として調査した。

第2遺構面のベース層(9層)も、中世前半期以前の土器等を多量に含む包含層(包含層III)で、おそら

くは第2遺構面造成のための整地土と考えられる。本層下面でも、柱穴跡、土坑等を確認し、第3遺構面とした。

第3遺構面のベース層である12層(包含層IV)は、調査区東端付近でのみ確認された、多量の炭化物や焼土粒等を包含する焼土層で、北東方向へ傾斜して斜面堆積状を呈する。下位の13層上面で被熱の痕跡は認められず、炭化物等は特に南半部に偏在して認められる。おそらく調査区南側より流入した2次堆積層と考えられ、第3面整地時に、上面は大きく削奪された可能性が考えられる。

13層は、古代末頃の水田作土層(SZ02)で、調査区西端で検出された畦畔により2筆に分けられる。これを第4遺構面aとして報告する。なお、本層は第3遺構面の遺構を保護するため、一部のみの調査に留めている。

SZ02作土層の下面で、溝状遺構1条(SD04)を検出した。検出位置は、SZ02と同じく後述する16・17層をベースとし、これを第4遺構面bとする。

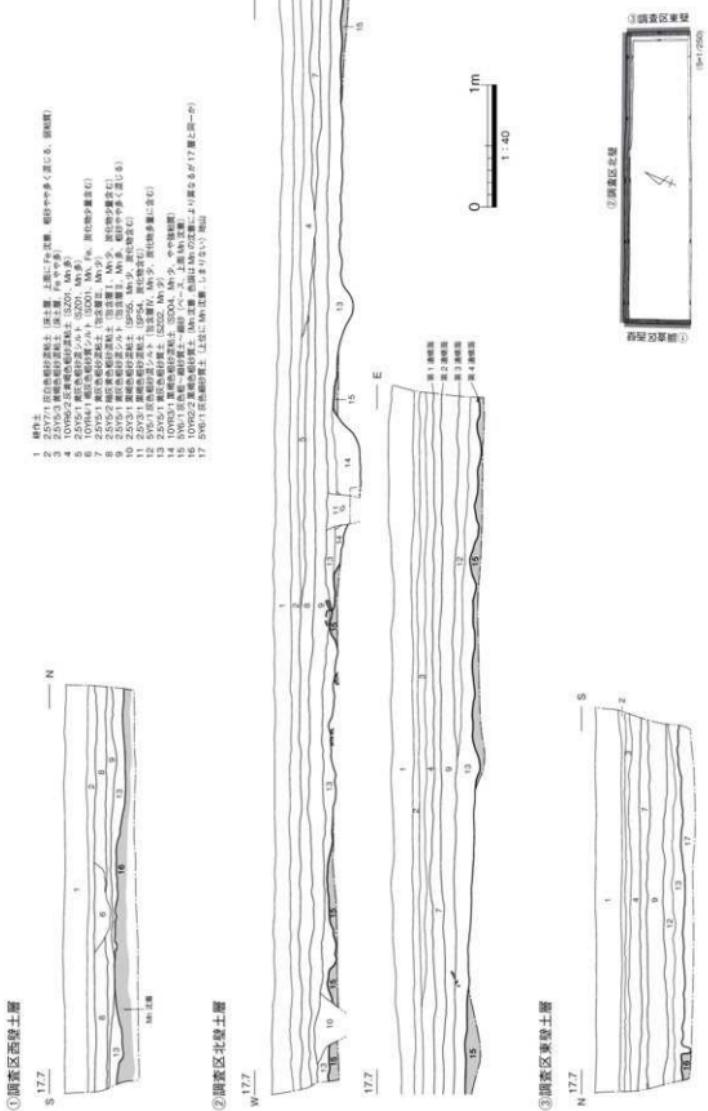
SZ02等のベースとなる16・17層は、調査区全域に堆積する粗砂質土~砂層で、下位に掘り下げるに従い、漸移的に砂層へと変化する。層上位は、上面のSZ02の影響により、顯著なマンガンの沈着を認める。30cm以上の層厚を有し、風化の進んだ城山産サヌカイトが出土する以外に明確な遺物を伴わず、明らかに上位の包含層等とは異なる環境下で堆積したと考えられたことから、ベース層と判断し、本層以下の調査は行っていない。

2. 遺構・遺物

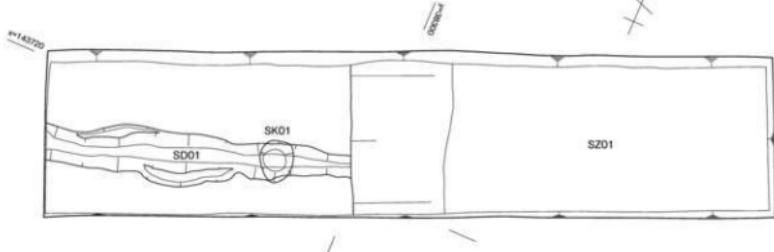
1. 遺構面

上述したように、現耕作土・床土層下で検出した遺構面である。溝状遺構(SD01)、土坑(SK01)、水田面(SZ01)を確認した。SZ01は、調査区東半で検出した落ち込み状の遺構である。緩やかに掘り込まれた西縁肩部は、N 2424°W の方向に直線状を呈し、現状地割の方向と一致し、東西長は8.5m以上を測ること、掘り方底面はほぼ平坦であることから、水田作土層と判断した。おそらく調査地は、棚田状の水田面として東西に分筆されていたと考えられる。遺物に18世紀後半頃の肥前系陶磁器等が出土しており、これを上限とする。また、明治期以降に下る遺物は出土しておらず、下限を幕末~明治初期に求められる。

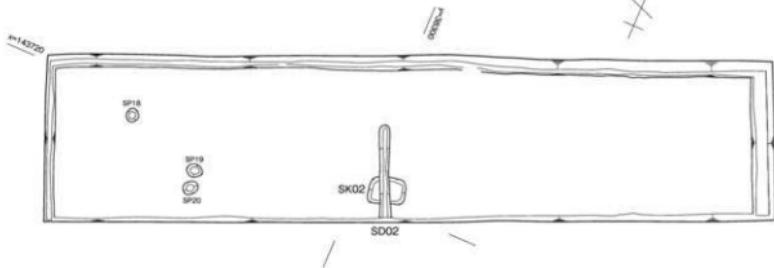
第22図 調査区壁面土層断面図



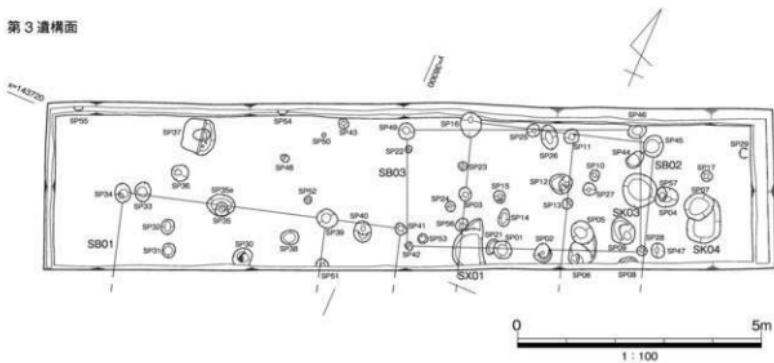
第1遺構面



第2遺構面

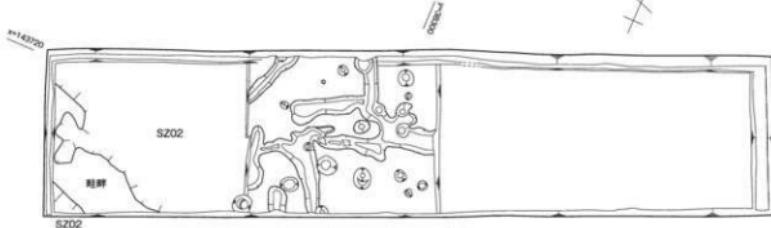


第3遺構面

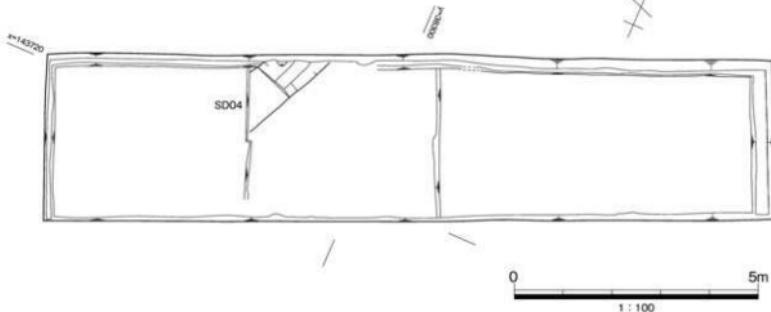


第23図 遺構平面図1

第4遺構面a



第4遺構面b



第24図 遺構平面図2

第2遺構面

柱穴跡群、土坑（SK02）、溝状遺構（SD02）を検出した。出土遺物より、13世紀前半頃を中心とした時期が想定できる。

SP18は、明確な柱痕は確認できなかったが、掘立柱建物跡の柱穴跡と考える。底面より7cm程度浮いて、完形の土師質土器小皿（Z7）が底部を上に、やや西に傾いて出土した。遺物の出土状況より、地鎮遺構の可能性が考えられる。

SK02は、整った隅丸長方形の掘り方をもつ土坑である。埋土は単層で、炭化材の細片やベース層プロック土が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が想定できる。遺物は、土師質土器類や土師器盤（40）等が大量に出土した。ほとんどの遺物が、土坑底面からは僅かに浮いて出土していること、遺構内で接合可能な資

料が乏しいこと等から、土坑埋め戻し時に廃棄された可能性が高いと判断された。

第3遺構面

本遺構面では、多数の柱穴跡群と掘立柱建物跡（SB01～03）、土坑（SK03・04）等を検出した。掘立柱建物跡の柱穴跡と考えられる遺構は約60基に及び、狭小な調査区のため、その多くは建物の復元にまで至らなかったが、頻繁な建替え等がなされていたことが予想される。なお、SB01・02は、調査区の関係上、桁行もしくは梁間の1部しか確認されず、本来は横列等として報告すべきだが、柱間間隔が揃い、規格的に柱穴跡が配される点等を考慮して、建物遺構として報告する。

SB01は、梁間と考えられる柱穴跡列が検出された

のみで、建物遺構とは断定できないが、上述した理由により、南北棟の掘立柱建物跡の可能性を想定する。調査区内での柱穴跡の位置から、梁間北列と判断した。東端の柱穴跡については、他の柱穴跡よりも規模が小さく、また東2穴目との柱間間隔もやや狭く配されることから、庇の可能性を想定している。

遺物は、各柱穴跡から出土しているが、特にSP35よりまとまって出土している。SP35の図示した遺物は、いずれも柱穴跡根石の下位より出土したもので、意図的に埋置した地鎮的な性格の遺物が含まれる可能性もある。

SB02も、他の柱穴跡と比較してやや規模の大きさSP03・13を隅柱、やや小さいSP13を床東とそれぞれ考え、SP16・11・45を北側の梁間列とする南北棟の総柱建物跡として復元した。建物主軸方向は、上述したSB01とほぼ一致し、建物間隔の点から、SB01と同時併存した可能性が想定される。なお、さらに東に延長して、東西棟の建物遺構となる可能性も残る。

SB03は、東西棟の隅柱建物跡で、調査後図上で復元した。桁行南列両隅柱は、他の柱穴跡と比してやや小さく、南に延長して、南北棟の建物となる可能性もある。建物主軸方向は、N 66.73° Eと、調査区周辺の条里型地割りの方向と概ね一致し、現状地割りが当該期にまで遡る可能性を示唆する。

SP08・10は、ともに遺物の出土状況から地鎮遺構の可能性を考える。SP08では、掘り方底面に接して、完形に復元される中国産白磁皿1点(25)が出土した。皿は半截され、一方は口縁部を上にほぼ水平に置かれ、もう一方は破断面を上に立てるように出土した。SP10では、底面より数cm程度浮いて、完形の土師質土器小皿が口縁部を上に、やや東に傾いて出土した。皿の口縁端部付近には、2箇所の煤痕が認められ、灯明皿として使用された後、埋納されたと考えられる。

SP37は、一辺0.7m程度の隅丸方形の掘り方をもつ柱穴跡である。やや北東寄りで、長径約0.3mの平面梢円形の柱痕を確認した。掘り方残存深は7cmと浅いが、底面は概ね平坦で、断面形は箱形を呈する。他の柱穴跡群とは、掘り方の形状が大きく異なり、時期的に遡る可能性も想定されたが、遺物は土師質土器等の小片が少量出土したのみであり、断定するまでには至らなかった。

土坑は2基(SK03・04)検出した。いずれも埋土中に、炭化材の細片やベース層のブロック土を多量に含むこ

とから、人為的に埋め戻された可能性が想定される。また、遺物の出土状況に規則性は認められず、土坑底面から数cm程度浮いて、多くは破碎されて出土していること等から、埋め戻しに際し投棄されたと考えられ、生活残滓の廃棄土坑の可能性が想定される。

なお、平面プランが安定せず、性格不明遺構としたSX01も、遺物の出土状況等から、SK03等と同様に、廃棄土坑と考えられる。

第4遺構面a

古代末頃の水田区画(SZ02)を検出した。田面はベース層を水平に削りして造成され、畦畔部分を帯状に削り残す。田面のベース層上面には、不整方向に掘られた小規模な溝状遺構が多数検出され、鋤溝の可能性が考えられる。

畦畔は、幅10.6m、高さ8cm、主軸方向N 64.36° Wである。主軸方向は、現状の地割りや第3遺構面の各建物主軸の方向と一致せず、概略的には周辺地形のコンターラインにはば合致し、旧地形を大きくは改變せずに、造成していたことが想像される。また畦畔中央には、田渡しにより西側の田面より給水したとみられる水口が認められた。

遺物は、調査面積が狭小な割には、28箇入りコンテナ1箱と比較的多量に出土した。出土した土師器碗や黒色土器碗等を時期決定の根据とし、本遺構の時期は11世紀後半頃を上限とする。

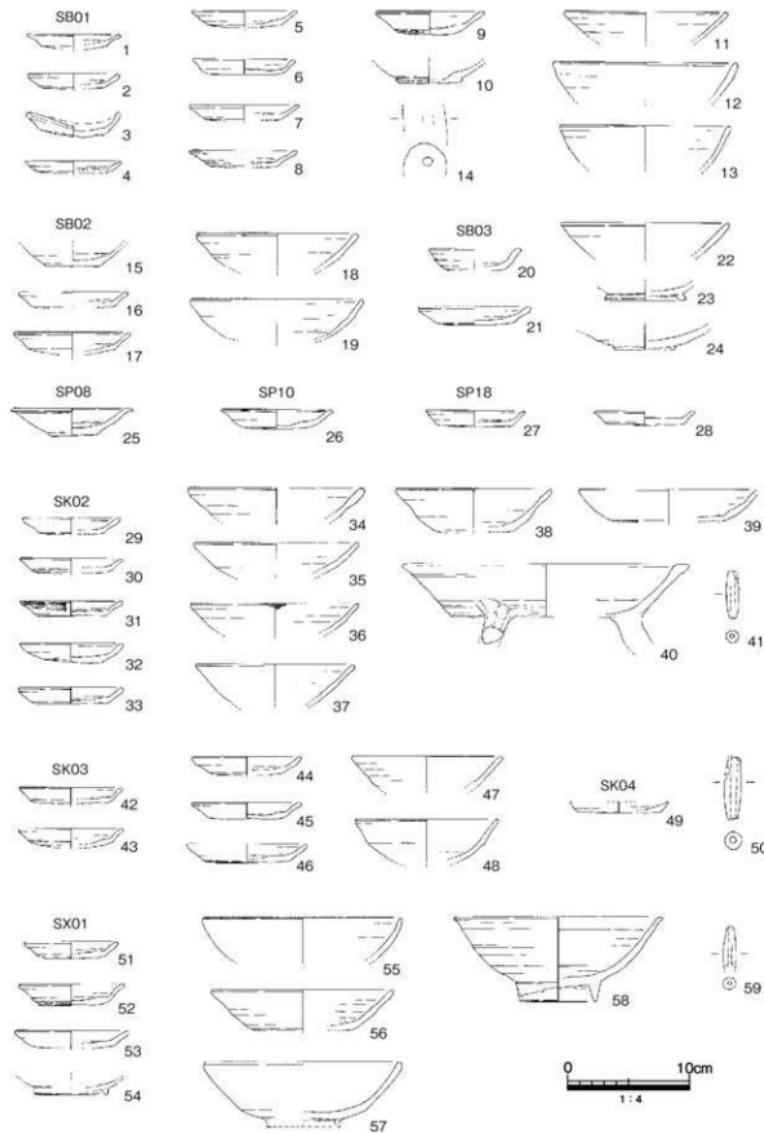
第4遺構面b

上述したように、第4遺構面SZ02作土下で検出した溝状遺構(SD04)を、本遺構面の遺構とする。遺物は、小片化した土師器片とサヌカイト剥片が少量出土したのみであり、SZ02より先行すること以上に、時期を特定することは困難である。しかし、流路方向N 24.96° Eで、SZ02畦畔と概ね直交することから、SZ02より大きくなれない可能性も想定される。

3. 小結

本調査区では4面に及ぶ遺構面の存在が確認され、11世紀後半以降、生産域等としての土地利用の実態が明らかとなった。

特に第2・3遺構面における建物跡群等の検出が注目される。実年代は、今後の詳細な遺物整理の結果を待つ必要があるが、概ね12世紀後半～13世紀中葉を



第25図 出土遺物実測図

第21表 出土土器等観察表

表 22 出土土器等觀察表

施設名	遺物名	部位	延長	口径	底径	形状	被覆	色調	外表面	内表面	底面	備考
SB01	上海貿易所	柱頭	16.2			柱頭	外：1.5mm以下の石英板等を半 内：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	外：青緑色、10YR5-3 内：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端にやや削れあり
SB01	上海貿易所	柱頭	14.7		8.4	柱頭	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端にやや削 れあり
SB01	上海貿易所	柱頭	15.9			柱頭	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端にやや削 れあり
SB01	柱頭・脚		17.3	7.0	6.4	柱頭	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端にやや削 れあり

第23表 出土器等観察表3

施設名	部位	長さ	最大径	底径	形状	被覆	色調	外表面	内表面	底面	備考	
SB01 (S929)	柱頭	2.9m	36	36	柱頭	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端にやや削 れあり	
SB02	柱頭	3.9	10	0.75	0.65	柱頭	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端にやや削 れあり
SB04	柱頭	3.3	1.35	0.75	柱頭	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端にやや削 れあり	
SB04	柱頭	4.25	1.65	0.75	柱頭	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	外：1.5mm以下と1.5mm以上を合 金屬	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端：外板：マット 下端：内板：マット	上端にやや削 れあり	

第24表 出土鍾乳洞表

中心とした時期が予想される。また、28号入りコンテナ29箱出土した遺物の半数以上が、当該時期に属するものである。本調査区周辺においては、当該時期が土地利用の大きな画期であったことは間違いない。以下、詳細は今後の本報告に譲るが、建物跡群について所見をまとめておく。

まず建物跡の主軸方向は、SB01・02とSB03の2者が認められる。後者の方向は、第2造構面SD02の流路方向、つまり現状の条里型地割りの方向と合致することから、SB01・02→SB03の変遷の可能性が想定される。つまり建物跡主軸は、建物群存続（第3造構面）の時期幅の中で、調査区周辺の条里型地割りと合致する方向へと、変更されている可能性がある。なお、各建物跡は有意な方向性を有していることから、建物跡群周囲には、建物跡を囲繞する何らかの区画施設が存在、つまり一定エリアが建物跡群敷地として区分されていた可能性も考えられる。

建物跡規模は、今回の調査で確認されたものについては、床面積30m²以下と復元される可能性が高く、大型建物跡は含まれない。柱穴跡規模も、直径30cm程度のものが一般的で、大型の掘り方をもつものはない。また、重複する柱穴跡も乏しく、同じ位置での建物の建替えの頻度は乏しかったと思像される。さらに、SB01とSB02の主軸方向は近似するが、両建物跡間の柱穴跡配置に、古代の官衙遺構にみられるような規格性は窺えない。

建物跡以外の遺構では、生活残滓の処理施設としての廐棄土坑がある。土坑は、概ね東半部に集中するものの、多くは建物遺構と重複し、数は乏しくかつ小規模で、遺物量も少なく、継続的な廐棄行為を窺うことはできない。つまり、生活残滓の廐棄は、敷地内部の余白地への一過性のものであったと考えられる。

以上の点から、建物跡群敷地全域へと、どの程度普遍化できるかは問題ではあるが、建物跡位置や規模等、敷地内部の空間構造は、固定・規格化されてはいなかつた可能性が窺える。

遺物の面では、統計的な処理は行えていないが、輸入磁器類の出現頻度はやや高い傾向が窺え、また土器類全体に占める供膳具の割合も高い傾向が認められる。この点は、比較資料に乏しく、遺跡の個性を現状では抽出し難い。今後の課題である。

一方で、数個体の灯明皿や盤といった、用途が限定される遺物や、包含層出土資料が多数を占めるものの、

土鍤や鉄滓、砥石等の生産関係の遺物も出土しており、調査区周辺で多様な階層や職業を担った人々が活動していた可能性を物語っている。

ここで視点を広げ、周辺の調査区の様相を見てみる。12～13世紀代の建物跡等の遺構は、第1～4・6・7・9・13・15・16・21～23・26・27次調査の各調査区において検出されている。これら調査区では、若干の遺構の粗密はあるものの、ほぼすべての調査区で柱穴跡群が確認され、調査区周辺へも普遍化できる可能性を示している。建物遺構以外には、土坑、戸井跡（第6・7・16次調査区）、土塙墓（第22次調査区）等が検出されており、内部に居住空間が存在したことが想定される。

どの程度の建物が同時併存していたか、時期的な問題を解決する必要はあるが、これら調査区を包摂する約250m四方エリア全域が、遅くとも12世紀頃には居住空間等として開発・造成されていた可能性も想定される。香川県内の他の遺跡には見られない、居住区画の集中的様相を認めることができる。

現在、このエリアのほぼ中央には、地元で「セイリュウ」と呼ばれる、綾坂を越えて国分寺に至る市道が、東西に貫通する。木下良氏は、この古道を古代南海道とされた（木下1977）。

一方、金田章裕氏は、木下氏の説を「阿野郡の北部で復原された条里プランと合致する里界線の位置と大きくずれる」ことを根拠に否定し、南約150mの位置に南海道を想定する（金田1995）。

両氏とも、南海道に指定する論拠が、必ずしも明示されているわけではなく、さらに発掘調査によても、確実な道路状遺構は確認されておらず、現状では南海道の位置を特定することは非常に困難である。しかし、いくつか断片的な情報は得られているので、以下にその可能性を探ってみる。

第7次調査では、調査区北部で、現状の地割に合致する「平安時代中頃」の2条の溝状遺構が確認され、「築地跡」として報告された（香川県1982）。しかし、提示された土層図によれば、2条の溝状遺構は、時期差をもって埋没したことが明らかであり、築地跡の可能性は低いと判断される。

また、第15・16次調査の調査区においても、地割に合致する東西方向の溝状遺構が確認され、平安時代末～鎌倉時代の埋没が推定されている（坂出市1992、

同1993）。

これら地割に合致する東西方向の溝状遺構は、いずれも木下説に近い位置から見つかっており、それから大きく外れる位置では、東西方向の溝状遺構はみられないか、あっても現状の地割の方向とは異なるか、規模が小規模なものが多いようである。つまり、古代南海道が本村地区を東西に通過していたことを前提とするなら、上記した調査区の溝状遺構に、古代～中世初期の南海道の側溝が含まれる可能性は否定できないと考える。

一方、木下説を西に延長した、南谷の谷部に見られる地割は示唆的である。この地割を詳細に観察すると、南谷を下る谷川は、谷中央部ではなく、鼓岡神社の所在する丘陵の北辺、つまり谷の南縁に固定され、やや蛇行しながら北西方に流下しており、その北側には、明らかに人工的に造成された幅約15mの平坦地が谷奥へと連続している（写真図版4）。この掘削状の平坦地地形の造成時期や目的は明らかではなく、その特定には発掘調査等を実施する必要があるが、この地形が南海道に関係する遺構である可能性も想定できる。

以上の検討から、12～13世紀代の建物跡群は、南海道といった陸上交通と、綾川を介した舟運との結節点に所在すると考えられる。この建物跡群の性格を、実証的にどのように位置付けるのかが今後の大きな課題となる。当該地区的調査は、個人住宅の改・新築を契機とした緊急調査が主体を占めるため、調査箇所は断片的で、調査内容も検討に耐え得るように資料化されているとはいえない。今後、こうした過去の調査資料の再整理も、併行して進める必要がある。

第5節 関連調査の成果

讃岐国府が所在した綾川流域には、旧石器時代以降の多くの遺跡が点在する。そのうち発掘調査が実施され、詳細な報告書が刊行された遺跡は数少ない。大半の遺跡は、地元の研究者等によって遺物が採集され、これまであまり資料化されることもなく、資料館等に保管されてきた。

今回の調査を契機として、これら考古資料について、関連資料調査として図化・写真撮影等を実施することとした。これまでに調査を実施したのは、鼓ヶ岡文庫、坂出市郷土資料館、鎌田共済会郷土博物館、滝宮天満

宮、個人が所蔵する、古墳時代から中世の出土資料約200点である。調査に当っては、所蔵者等関係各位に格別のご配慮を賜った。記して、感謝申し上げる次第である。今回は、それらの中で、鼓ヶ岡文庫と田村久雄氏、鎌田共済会郷土資料館がそれぞれ所蔵する資料の一部について報告する。今回掲載できなかつた資料については、機会を改めて報告することとしたい。

鼓ヶ岡文庫所蔵資料

いずれも正式な調査による出土品ではなく、あくまでも採集品であり、収蔵後の混乱も予想される。

60～70は、新宮古墳出土の須恵器である。65・66・68・70の器表面に、「新宮古墳」の墨書きがあり、その他の資料は新宮古墳と書かれたラベルとともに展示されていた。いずれも完形もしくはそれに近い状態の資料であり、古墳の副葬品であることは確実であろう。60と61、62と63は、それぞれセットとして展示されており、時期的な面でも矛盾はない。4点の杯類の中で、62・63の杯類が古くTK43型式期に、60・61の杯類はTK209型式期新相～TK217型式期古相に、それぞれ位置付けられる。杯類以外の資料は、TK209型式期を中心とした時に位置付けておきたい。

特徴的なのは、64・65・67～70の小型の一群で、副葬専用に特化して製作された可能性が考えられる。想像を逞しくすれば、古墳の被葬者とこれら須恵器工人とのつながりも想定され、これら資料が新宮古墳からの出土品であることが断定できれば、被葬者像を考える上で重要な資料となろう。

新宮古墳の副葬品については、漢道より出土した資料が既に報告されている（川畑・渡部2008）。報告者は、漢道出土須恵器がTK209～TK217型式期であり、この年代と石室構造から、TK209型式期の古墳の築造を推定している。

それら資料と比較すると、文庫所蔵資料に時期的に古く位置付けられるものが含まれ、古墳の築造時期も遡らせる必要が生じてくるが、この点は今後の調査に委ねたい。

87・88は耳環、89は管玉である。いずれも和紙に包まれて、62・63の須恵器に収めて展示されていた。新宮古墳の資料とみられるが、断定はできない。耳環・管玉以外に、鉄製とみられる径1.5cm程度の球状の金属器が同包されていたが、時期・用途が不明のため、

掲載していない。2点の耳環は、いずれも銅芯金張り中空の環で、箔は良好に遺存する。また、いずれも接端面の箔が剥離しており、中空の状態が確認できる。外径や断面径が僅かに相違するものの、素材や箔の状態等は近似しており、一对のものである可能性は高い。87は、上下長2.19cm、左右幅2.29cm、左右内径1.30cm、断面径0.48～0.65cm、重量5.39g。88は、上下長2.19cm、左右幅2.34cm、左右内径1.21cm、断面径0.56～0.69cm、重量5.27g。管玉は、軟質緑色凝灰岩製とみられる。X線写真では、鉄製工具による片面穿孔と判断された。長さ1.94cm、径0.71cm、孔径0.29cm、重量1.27g。

71・72は城山古墳出土とされる資料である。現在城山古墳とされる古墳は確認できず、早くに亡失したか、今までに名称が変更された古墳からの出土資料と考えられる。72の器表面に古墳名が墨書きされている。状態から、いずれも古墳出土の副葬品として大きな矛盾はない。概ねTK43型式期新相～TK209型式期古相に位置付けられると考えられる。

73の内面には、「本郡西庄村開墾地ニテ採取 昭和〇年三月 寄附人 字遊田藤井小太郎」と墨書きされた和紙が貼付されている。おそらく西庄村町付近の古墳からの出土資料であろうが、具体的な古墳名は不明。口径等の点で、後述する出土遺跡不明の75とセットとなる可能性がある。TK43型式期新相と考えられる。

74は、西庄古墳出土とされる資料で、器表面に古墳名が墨書きされている。西庄古墳も、現在その所在は確認できない。脚部を欠損する以外は完形品で、古墳の副葬品として無理はない。なで肩の肩部に明瞭な沈線を施す点等から、TK209型式期を中心とした時に位置付けられる。

75～86は、西庄古墳や城山古墳、讃岐国跡出土の資料として展示されているが、個々の資料に出土土地の記載がなく、出土遺跡不明の資料として報告する。完形品の資料が多く、80・84～86に一部欠損した資料が含まれるが、すべて古墳の副葬品として問題はない。TK43～TK217型式期を中心とする多様な時期の遺物を含み、複数の古墳の資料が混在している可能性も考えられる。

90・91は、出土土地不明の須恵器で、いずれも十瓶山系跡群の製品である。90は、広口形態の壺で、口縁部の一部を欠損する以外は完形である。口縁端部は肥厚せず四角くおさま、端面に浅い1条の沈線を施す。坂出市三ツ松遺跡や塩口遺跡等、同形態の壺を骨蔵器

として使用した火葬墓が、旧阿野郡域を中心に確認されており、本例も状態から骨蔵器として使用されたと考えられる。91は、口縁部を欠損する以外は完形の甕。外面には底部より螺旋状に格子タタキが施される。状態より、一般的な集落遺跡や生産地からの出土品である可能性は低く、火葬墓骨蔵器や経塚外容器としての使用が想定されるが、類例に乏しく断定はできない。いずれも12世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

92は、完形の須恵器短頭壺で、体部中位を焼成後穿孔する。体部外面に「國廳址」の墨書があり、国府城より出土した可能性が高いが、完形品であることから、疑問が残る。儀器化されており、何らかの祭祀遺構に伴う可能性も考えられる。

93~98は、中世土師質土器で、積み重ねられて展示されており、97の内面に、「昭和□(七カ)年五月 土器六点 字猫山 藤井亀三郎田畔 発掘」と墨書された和紙が貼付されている。点数が合致することから、すべて府中町猫山の出土品と考えられるが、後述する出土土地不詳の土師質土器もあり、収納後に資料が混乱した可能性も考慮しなければならない。ただし、時期的には、13世紀後半を中心とした一括出土品としてよい。すべて完形品であり、何らかの埋納遺構に伴う遺物と考えられる。猫山周辺では、現在までに遺跡等は確認されておらず、出土位置や性格について特定することはできない。

99・100は、東梶遺跡出土の中国製磁器である。いずれも完形品。99は、龍泉窯系碗I-1類、100は、同皿I-1・b類である(横田・森田1978)。東梶遺跡は、綾川河口付近三角州帯の微高地に立地する(香川県2007)。発掘調査がなされていないため、遺跡の詳細は不明である。資料の状態や出土地より、集落内の中世墓の副葬品であった可能性が想定される。

101~105は、出土土地不詳の中世土師質土器である。いずれも完形品で、埋納遺構等からの出土の可能性が想定される。時期的には、12世紀代を中心とする102・103・105と、13世紀代を中心とする101・104に大別でき、複数の遺跡からの出土品が混在している可能性も想定される。

106~115は、瓦類である。文庫には、掲載した以外に、開法寺跡、讃岐国府跡、府中・山内瓦窯跡等から出土したとされる平・丸瓦類が多数展示されている。それらについては、今回は調査を見送り、軒瓦類についてのみ報告する。以下、瓦の型式番号については、高松

市資料館の呼称を使用する(高松市1996)

106・107は、高句麗系の十葉素弁蓮華文軒丸瓦(KH101)で、107の丸瓦部凸面に「府廳瓦」と墨書され、106とともに「國廳跡造瓦」として展示されている。しかし、後述するように、瓦の年代観や近年の調査資料から、国府施設の所要瓦ではなく、開法寺創建時の瓦と考えられる。106と107は、2箇所確認される範囲から同范とみられる。106の瓦当厚は、内区で1.2cmと薄く、107は同2.0cmとやや厚い。現状で確認できる他の出土資料は、前者が多数を占めるようだ。以下、前者をKH101a、後者をKH101bと呼称し、前者が時期的に先行すると考える。

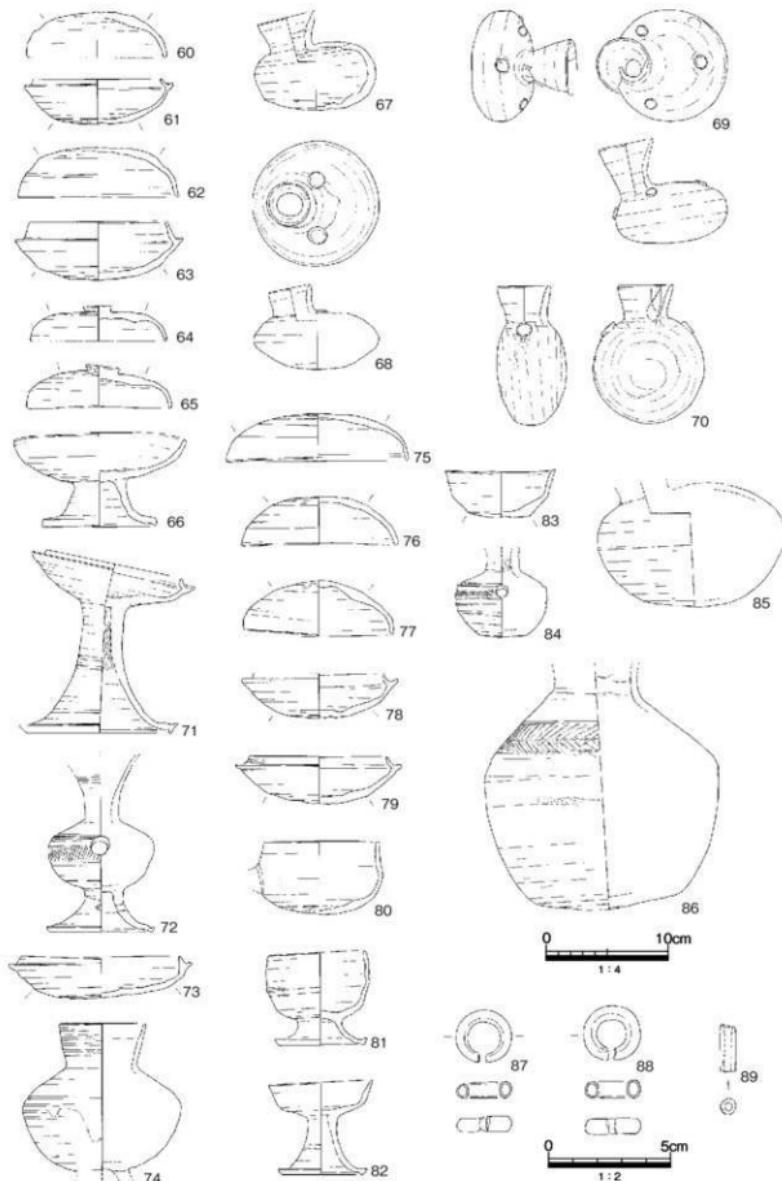
さて、開法寺KH101は、比較的小さな中房に1+5の蓮子を配し、突線のみで表現された平面的な花弁は十葉に細弁化され、弁間に珠紋を配する。いわゆる豊浦寺系軒瓦と考えられるが、蓮子数や弁数が異なり、また弁央の軸線を欠く等、いわゆるオリジナルと比べて大きく変容している。直接的な系譜関係を特定することは困難だが、豊浦寺系軒瓦をベースとして、別系譜の軒瓦の要素を取り込み、開法寺創建時に新たに創出された型式と捉えたい。

開法寺への豊浦寺系軒瓦の情報発信源は、大和豊浦寺と同范瓦を共有しつつ、後出型式を派生させた揖河泉地域が有力と考えられる。揖河泉地域での豊浦寺系軒瓦の展開時期は、7世紀前半~中葉と考えられている(上田2007)。KH101の成立時期を直接特定することは困難だが、KH101aの丸瓦接合位置は高く、中房径が小さい、瓦当の厚さは薄く、シャープに整形されている点等より、7世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。

つまり、開法寺の創建は国府設置以前に遡り、近年の調査成果から主要堂塔の完成は7世紀末~8世紀初頭頃に下ると考えられる。從来から指摘されている(羽床1980、松原1988、渡部1998)ように、在地豪族の氏寺として開法寺が建立されたと考えられる。

また、讃岐地域への豊浦寺系瓦の導入の背景については、揖河泉地域と同様に、蘇我系氏族や渡来系氏族、屯倉等が関係していると考えられる(近藤1997、上田1998、清水2000、上原2003)。これらの点については、稿を改めて詳述したい。

108・109は、開法寺跡出土とされる、川原寺系の八葉複弁蓮華文軒丸瓦(KH105)である。近年の発掘調査によても、同范の瓦が出土しており、開法寺跡か



第26図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図1

らの出土資料と考えられる。明確な范傷はなく、范の異同は不明だが、細部形状から同范の可能性は高いと考える。県内では、同范例が、鶴庵寺と坂田庵寺より出土している（蓮本 1993）。

110～112は、「国分寺瓦窯跡遺瓦」として展示されており、事実とすれば府中・山内瓦窯跡出土資料となる。110は、八葉素弁蓮華文軒丸瓦（KH106）で、これまで同瓦窯跡からの出土例の報告はなく（渡部 2007）、時期的な点と、近年の調査から、開法寺跡出土の可能性が高い。弁の上には、やや不明瞭だが子葉状の表現が認められるものもある。川原寺式の影響下に成立した可能性が説かれている（蓮本 1993）が、むしろ河内西琳寺式系C類もしくは善正寺式（上田 2007）を母胎として成立し、讃岐へもたらされた可能性も考えられる。

111は、八葉單弁蓮華文軒丸瓦で、瓦窯跡のはか、同范例は讃岐国分寺跡（SKM09）、国分尼寺跡（KB106）、開法寺跡（KH110）から出土している。瓦当裏面に「山本スエ寄贈 壱千余年ノ瓦 明治廿四年 鑑定□田文学士 福□教□」と朱書きされている。112は、均整唐草文軒平瓦で、瓦窯跡のはか、同范例が讃岐国分寺跡（SKH01C）より出土している。以上2点は、瓦窯跡出土品としても矛盾はない。

113は、「菊塚御序遺瓦」として展示されている資料である。菊塚は、崇徳上皇に関わる伝承が伝えられており、その付近より出土した資料の可能性もあるが、正確なことは不詳である。県内では、同范・文の瓦が綾川町西村1号窯跡、同北条池北畔瓦窯、同陶邑古窯跡群、高松市如意輪寺窯跡から出土している。

如意輪寺窯跡出土資料については、以前その年代観について言及し、11世紀末頃との実年代を提示した（藏本 2005）。その後、渡邊誠氏は、同文系資料の詳細な検討を行い、如意輪寺例を12世紀前葉以降とした（渡邊 2007）。如意輪寺窯跡は十瓶山窯跡群からの出張製作によって築造されたと考えられ、瓦当文様に表現された差異や技術上の省力化等を、十瓶山窯跡資料との年代差として大きく評価しなかったことが、渡邊氏の年代観との相違が生じた要因である。しかし、この点は今でも有効と考えており、その後の知見を踏まえても、如意輪寺例は12世紀初頭までに収まり、鼓ヶ岡例は11世紀末頃に位置付けられるのではないかろうか。消費地遺跡での良好な資料の出土を期待したい。

114は、綾川河床遺跡から出土した均整唐草文軒平瓦で、文庫所蔵考古資料の中で、数少ない出土位置の確定な資料である。県内では、同文（范？）例が、綾川町龍燈院にある（安藤 1967）。11世紀末頃か（上原 2009）。

なお、綾川河床遺跡からは、古代の須恵器片や11～12世紀頃の瓦片等が出土している。周辺に寺院や官衙遺跡が所在した可能性も考えられるが、基壇や礎石等の遺構は確認されておらず、地形的に適地とまではいえない。綾川上流域の窯跡群の生産物の集散地であった可能性も想定され、この点は出土遺物の詳細な検討を行い、別に論じたい。

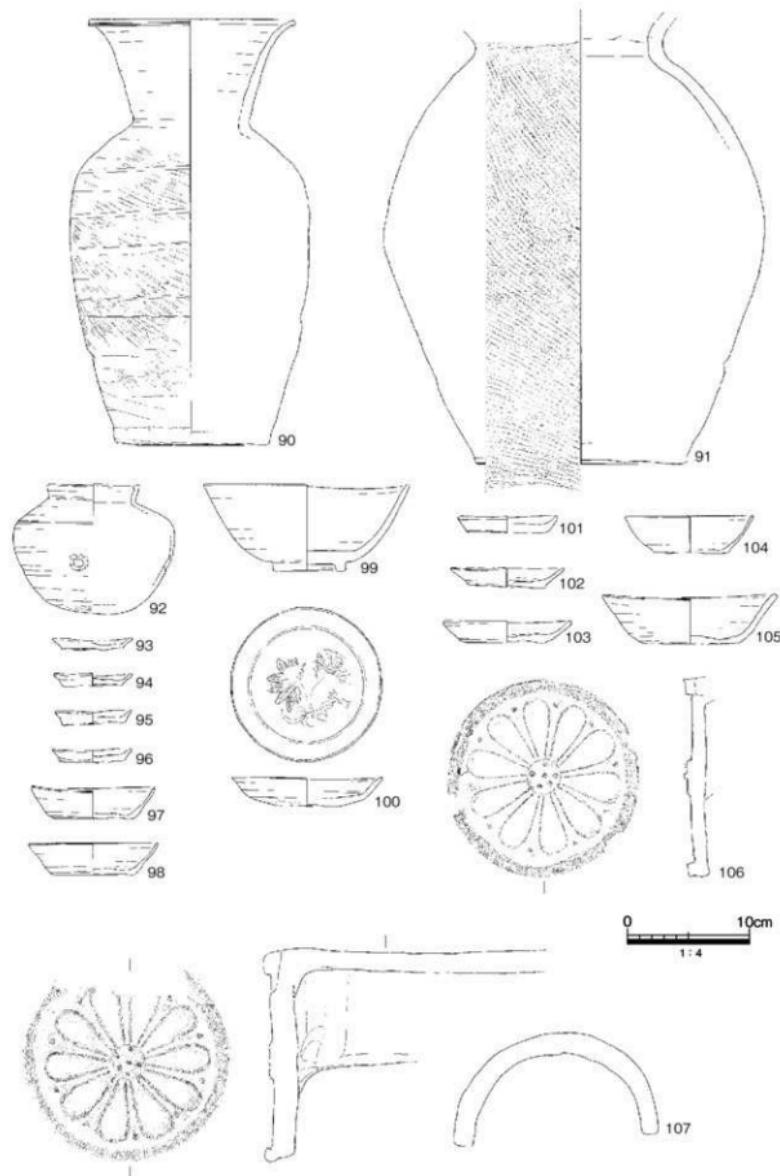
115は、三巴文軒丸瓦で、瓦当面と丸瓦部の一部を欠損するが、およそ全形を窺うことができる。丸瓦部四面に「国分寺（鼓岡藏）」と注記がある。焼成は非常に良好で、いわゆる焼瓦である。瓦当文様は、左卷三巴文の外側に円環状の圖案が配され、外区に20個の珠文が巡る。内区は瓦筋を外した後ナデ調整される。周縁は幅広く、丁寧なナデ調整が施される。丸瓦部凸面は、縄目タキの後、丁寧にナデ調整され、タキは狭端縁付近にのみ認める。凹面は、やや細かな布目痕が残される。瓦当部と丸瓦部との接合部は、ナデ調整が施された後、細いヘラ状工具により、ランダムなミガキ状の調整が加えられるが、その意図は不明である。側面觀B型、丸瓦部狭端縁は面取りされ、滑り止めはB型、瓦当面への面取りは行わない。これらの点から、15世紀後半頃に位置付けられよう（小林・佐川 1989）。

注記のとおり、国分寺現本堂に葺かれていた瓦の可能性は高いと判断されるが、時期的に室町期に下り、現本堂建立時の瓦ではなく、補修瓦と考えられる。

116～125は銅錢で、掲載した他に寛永通寶1点が展示されている。寛永通寶は、他の銅錢と状態が大きく異なり、伝世品と考えられる。報告する資料は、いずれも表裏に他の銅錢の銷着痕を認め、出土資料であることは間違いない。

府中町内の銅錢出土遺跡としては、西福寺の古墓（松浦 1968、佐藤 1993 a、大山 1999）と、妙楽寺埋納錢（新宮史 1993）がある。前者からは副葬品として萬年通寶や神功開寶が、後者からは北宋錢を中心とする多量の銅錢が、それぞれ出土したとされる。

前者の銅錢については、松浦正一氏により詳細な記録がある。松浦氏は、「香川県貨幣骨董出土地表」に



第27図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図2

「坂出市府中町西福寺出土貨幣（30文以上）。昭和5・6年発見。西江善兵衛 西紋伊太郎、鎌田共清会6・7文 鼓岡文庫6文 香大6文。万年通宝 神功開宝。骨壺に副葬か。」と記す。松浦氏が、どのようにしてこの古墓や、その出土遺物の情報を知ったのかは、今となっては確かめることはできない。しかし、出土から程なく、文庫に収蔵された6枚の銅銭の拓本を採拓している（大山 1999）ので、この4点の皇朝銭は、西福寺古墓の出土資料であると断定してよいと考えられる。なお、当時の拓本は6点（和銅開珎1、萬年通寶1、神功開寶4）が残されているが、神功開寶2点の所在は不明で、残された銅銭にも当時の拓本と比較して、劣化が進行していることが確認できる。また、記録にある骨壺がどこに収蔵されたかは不明で、既述した文庫所蔵の須恵器壺としては、銅銭との間に年代の開きが大きく、課題が残る。

後者は、現在30点程度が銅銭の埋納容器である壺とともに、坂出市指定文化財として残されているに過ぎない。後述する文庫所蔵の北宋銭等が、これら的一部である可能性はあるが、断定はできない。

116～119は西福寺古墓出土の皇朝十二銭で、116は和銅開珎（初鑄708年）、117は萬年通寶（初鑄760年）、118・119は神功開寶（初鑄765年）である。120～124は中国北宋銭で、120は、皇宋通寶（初鑄1038年）。半折している121も、皇宋通寶と考えられる。122は、やや不鮮明ながらX線写真から、景德元寶（初鑄1004年）の可能性が考えられる。123も同様に、元符通寶（初鑄1098年）の可能性が高い。124は寧元寶（初鑄1068年）。125は明の永樂通寶（初鑄1406年）で、これが最新銭となる。

田村久雄氏旧蔵資料

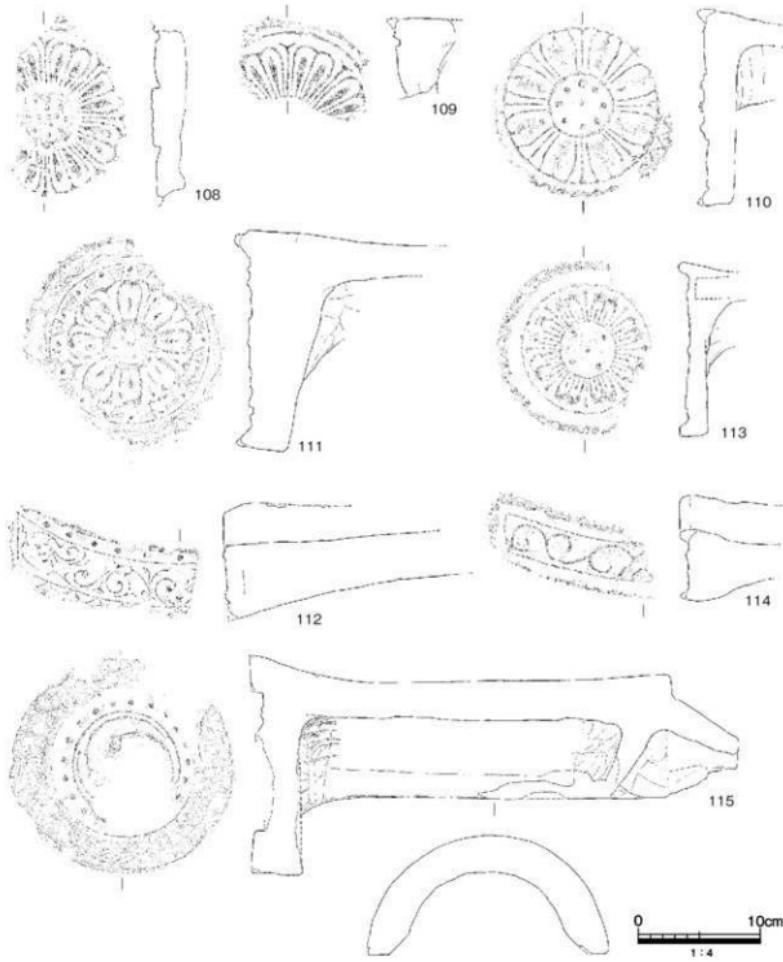
126～129は、綾川町在住の研究者田村久雄氏所蔵の資料である。讃岐国衙による管理・経営が想定されている、綾川町十瓶山周辺の諸窯（森 1968、渡部 1980、羽床 1985、中山・佐藤 1998、上原 2009）の出土資料で、これまで未公表であったことから、氏のご好意により今回報告することとした。なお、出土窯跡名は田村氏のご教示による。

126は、丸山西窯跡出土の均整唐草文軒平瓦である。瓦當右端部の小片で、全体形状は不明。全面に鉄分が付着し、茶褐色を呈する。焼成は非常に良好。外観に、やや崩れた唐草文が配される点が特徴的である。

瓦當に対して瓦当面の幅が狭く、上周縁を欠き、右周縁と下周縁の幅は一定せず、周縁の規格性に対する意識は乏しい。凹面はやや細かな布目痕後、瓦当部を幅4.6cm程度瓦當よりみて右から左へケズリ調整を施す。布は縱方向に使用しているとみられるが、小片のため断定はできない。側縁も幅1.0～1.4cm程度ケズリ調整を加える。凸面は瓦當部より狭端部方向へケズリ調整し、さらに瓦當部付近に弱いナデ調整を加える（I手法）。側面も同様にケズリ調整する。額部は直線額。成形は、厚さ32cmのやや厚い粘土板の凸面側に、瓦當部付近のみ厚さ1.2cm程度の薄い粘土板を貼り足している（b手法）。県内では、丸山西窯跡（香川県 1997）と鴨庵寺（KM204、高松市 1996）から同文（范？）の瓦が出土しており、11世紀後半頃と考えられている（上原 2009）。

鴨庵寺の八葉複弁蓮華文軒丸瓦（KM107）は、時期的な点と瓦當文様等から、この軒平瓦と組み合う可能性が高く、鴨庵寺では11世紀後半まで堂塔の補修がなされていたことが確認できる。一方、開法寺跡から出土した均整唐草文軒平瓦（KH206）は、やや古く11世紀前半とされる（上原 2009）。醍醐庵寺でも、12世紀代の瓦が確認されており、綾川下流の古代寺院3寺では、平安後期までは堂塔の維持・補修が行われており、その際使用されたのは十瓶山窯の製品であることが確認できる。

127は、丸山2号ないし3号窯跡出土とされる、五連巴文軒平瓦である。瓦當を含めた小片で、全体形状は不明。焼成は非常に良好で、須恵質を呈する。凹面はやや粗めの布目痕後、瓦當部を幅1.8～21cm程度瓦當よりみて左から右へケズリ調整を施し、その上を弱くナデ調整する。凸面は、粗い縦目タキを施した後、瓦當部を幅1.5～3.0cm程度瓦當よりみて右から左方向へ、ケズリ調整を加える。凸面のタキは、いわゆる円弧状を呈する（IV手法）。側面は、縱方向のケズリ調整の後、凹面側を幅0.7cm程度、凸面側を幅0.5cm程度メントリ状にケズリ調整を行い、さらに弱いナデ調整を加える。ケズリ調整は浅く、直前の板状工具痕が明瞭に残る。額部は直線額。成形は、明瞭な粘土板の接合痕跡は認められず、粘土塊を捏ね合わせる等して成形した可能性が想定される（c手法）。丸山西窯跡（香川県 1997）から同文の瓦が數種類出土しているが、同范のものは報告されている資料の中には認められなかった。12世紀中葉を前後する時期と考えら



第28図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図3

れる（上原2009）。

128は、丸山西廻跡？出土の半截花唐草文軒平瓦である。瓦当右半部の小片で、全体形状は不明。焼成はやや良好で、瓦質にやや近い。瓦当文様は、中心に半截花文を配し、そこから3転する唐草が左右に伸び、4葉の子葉が付すとみられる。右端の唐草は一部が裁ち

切られており、范をやや縮めた可能性がある。上周縁はかろうじて認めるが、右と下周縁をそれぞれ欠き、周縁の規格性に対する意識は乏しい。四面の大半は欠損するが、やや細かな布目痕が瓦当部にまで延びるようで、その後に1～2の押圧が認められる。布の方向は不明。凸面は、瓦当部にまで粗い繩目タタキが施さ

れる。凸面のタタキは、Ⅱ手法に類似するが、瓦当側よりみて右側のタタキ幅が広がり、均等なV字形を呈さない（Ⅲ手法）。側面はケズリ調整されているようだが、器表面の荒れのため細かな観察はできない。額部は曲線額に近い。成形は、厚さ2.1cm程度の粘土板の凸面側に、平瓦部から瓦当部にかけて厚さ1.5cm程度の粘土板を貼り足す（a手法）。11世紀後半代とされる（上原2009）。

129は、お藤天神出土の偏向唐草文軒平瓦である。瓦当部はほぼ完存するが、平瓦狭端部付近を欠損する。焼成はややあまい。瓦当文様は、右から左へ7転反転する唐草文が三重の突線で抽象的に表現される。意匠的に七連三巴文にも通じる図案である。しかし反転する各唐草の表現は細部で異なり、また右から左へ割り付けながら唐草を配しているが、左端部で瓦面幅が足りなくなつたため、最後2転分の唐草は大きく省略され小型化して描かれる等、図案化の点で稚拙さは否めない。唐草文の四周は圓線によって画される。上下周縁に対して、左右周縁の幅は著しく狭く、周縁の規格性に対する意識は乏しい。上周縁には一定間隔で珠点が配され、下周縁にも同様の珠点が配されていた可能性は高いが、欠損・磨耗のため断定はできない。凹面はやや細かな有目痕の後、瓦当部を幅2.6～3.5cm程度瓦当よりみて左から右へケズリ調整を施し、さらに両側縁部にも幅1.2～1.4cm程度のケズリ調整を加える。凸面は粗い繩目タタキの後、瓦当部を幅1.5～4.0cm程度瓦当部よりみて右から左方向へケズリ調整し、さらに弱いナデ調整を加える。凸面のタタキは、平瓦部両端より瓦軸線に対して斜交させて施し、瓦当を手前にしてみるとV字状を描いている（Ⅱ手法）。側面も同様に瓦当部より丸瓦狭端部方向へケズリ調整する。額部は曲線額。成形は、aもしくはb手法とみられる。県内では丸山窯跡（香川県1997）や龍燈院（安藤編1974）から同系のものが出土しており、型式的にそれらより先行する。11世紀後半代の可能性がある（上原2009）。

錦田共済会郷土博物館所蔵資料

博物館には、開法寺、醍醐庵寺、十瓶山窯跡をはじめとする、坂出市周辺の寺院・窯跡から出土した平・丸瓦等を多数所蔵するが、以下では軒瓦のみ紹介することとしたい。

130は、西庄町醍醐庵寺出土の八葉素弁蓮華文軒丸

瓦（DG102）である。

131は、府中町安楽寺跡出土の巴文軒平瓦である。127のような連巴文の各巴間に、鼓形のレリーフを配したもので、巴は平面的な表現となり、127よりは後出する様相を認める。安楽寺は、低丘陵上に建立された寺院とされるが、現在果樹園等に開墾され、詳細は不明。凹面に「昭和十二年二月二五日 綾歌郡府中村 安楽寺跡經塚調査時採集」と注記されているように、12世紀代の經塚が存在し、經筒等の遺物が、東京国立博物館に収蔵されている。凹面は、細かな布目痕の後、瓦当部を幅1.3cm程度、瓦当側よりみて左から右方向へケズリ調整される。凸面は、粗い円弧状タタキ（Ⅳ手法）の後、瓦当部周辺にナデ調整？を加える。成形は、c技法とみられる。同文（范？）例が、府中町弘法寺跡、神谷町神谷神社、多度津町鴨神社にある（上原1967）。

132は、江尻町金山櫛現出土の三巴文軒丸瓦である。瓦当裏面に、「綾歌郡金山村 金山櫛現ニテ拾得 金山村前田□□□ 昭和十年二月五日」の墨書きがある。瓦当部のみの破片であり、丸瓦部を欠損するため、時期決定の困難な資料である。瓦当面は、二次的被熱のために剥落がみられる。瓦当部外縁外端に部分的な面取りを認め、側面觀はA型とみられる点等から、15世紀前半頃と考えておきたい。

360は、西庄町八十場薬師堂出土の唐草文軒平瓦である。平瓦部凹面に「綾歌郡西庄村」、瓦当裏面に「八十場薬師堂 明治四十一年五月二日」とそれぞれ墨書きがある。欠損部分が多く、瓦当文様も判然としない。界線は全周するようあり、顎貼り付けとみられる点等から、15世紀代と考えておきたい。

讃岐国衙と十瓶山窯跡群の瓦生産

旧阿野郡南部、綾川町十瓶山周辺には多数の窯業遺跡が分布する。7世紀中葉から14世紀中葉の長期に亘る操業期間に、須恵器窯約80基、瓦窯約60基が設けられ、南海道最大の窯業生産地とされる（佐藤1993、田村ほか2008）。十瓶山窯跡群（陶窯跡群）と呼ばれ、とくに国府設置期以降には、讃岐国衙による管理・経営多くの先史により指摘されている。

平安時代後期、十瓶山窯跡群で生産された瓦は、国内で消費されつつも、京都へ搬出されていたことが古くより知られている。また、十瓶山窯跡群からやや離れた寺院では、近辺に瓦窯を設け、十瓶山窯からの出



116



117



118



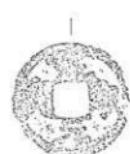
119



120



121



122



123



124



125

 0 3cm
1:1

第29図 鼓ヶ岡文庫所蔵遺物実測図4

張製作により瓦を焼成する例がしばしば見られる。高松市如意輪寺窯、普通寺市百合山窯、三豊市大水上神社1号窯、徳島市国分寺瓦窯跡等である（上原2001・2009）。平安京周辺へは製品を搬出し、讃岐国内や近国の寺院へは、製品の搬出とともに瓦工を派遣し対応するといった、土器生産とは異なった、瓦特有の生産方式が採用される。

こうした讃岐国における瓦生産の特徴について、上原真人氏は、「造国（所課国）制から知行国制への変遷」に注目し、造国制期の「讃岐系軒瓦は量的にまとまつても、紋様や法量がまちまちで、寄せ集めた瓦という感をぬぐいがた」く、「造国制のもとでは、国司管下の瓦窯は野放図」な生産体制・供給形態であった可能性を指摘する。それに対応するかのように、「11～12世紀の京都で消費した瓦を、かなりの量、在地寺院が消費している事実」には、「平安後期には、弘法大師にまつわる聖地として、古代寺院の復興が讃岐国内で積極的に推進され」た「讃岐国独自の信仰的背景」が推定されるとした（上原2001・2009）。

こうした上原氏の業績に導かれつつ、平安時代後期における讃岐国衝による窯業生産の実態について、以下若干の私見を提示し、讃岐国府研究の一助としたい。

既述したように、十瓶山窯跡群の軒平瓦各部の成・整形技法には、いくつかのヴァリエーションが認められる。わずか数点の資料の観察であり、十瓶山諸窯で焼成された瓦全体のヴァリエーションを網羅しているわけではないが、瓦の成形技法と、凸面の成・整形技法を軸に、とりあえずの見通しを示しておきたい（そのほかに、四面側縁や瓦当部周辺のケズリ調整の広狭、有無等も指標となろう）。

凸面の整・成形技法は、タタキ技法の差異に注目し、I～IVの各手法に分類したが、型式的にはこの順に変遷する可能性が考えられ、上述した個々の資料の製作年代観とも概ね矛盾しない。いわゆる桶巻作りに特有の瓦長軸に平行するタタキではなく、一枚作りに特化したタタキ技法と考えられ、その変化の方向性は、機能性や見た目を重視したものではなく、製作の手間の省力化であつただろう。高松市片山池窯跡（高松市2009）の製品の様相からも、こうした瓦長軸に斜交するタタキ技法は、11～12世紀代の十瓶山諸窯での瓦の量産化を契機として成立した可能性が考えられる。

こうした方向性が妥当であれば、瓦の成形技法は、a・b技法→c技法への変遷が推定される。a・b技

法は、瓦当部周辺へ別途粘土を補填することによって瓦当部を肥厚させ、瓦面に一定の厚さを成形する技法で、規格の異なる2種類以上の粘土板を必要とする。一方c技法は、a・b技法とは異なる手法で成形されている可能性が高く、狭端部端面や両側面に布目痕がしばしば観察されることから、布を敷いた箱形の凸型成形台に、直接粘土塊を充填して製作した可能性も想定される。こうした方法だと、粘土板製作の手間が省略され、比較的容易に規格的なサイズの瓦を製作することができたのではなかろうか。たたらから粘土板を切り出したものではないことは、既に指摘されている（上原1978）。技法の詳細については、改めて検討したい。

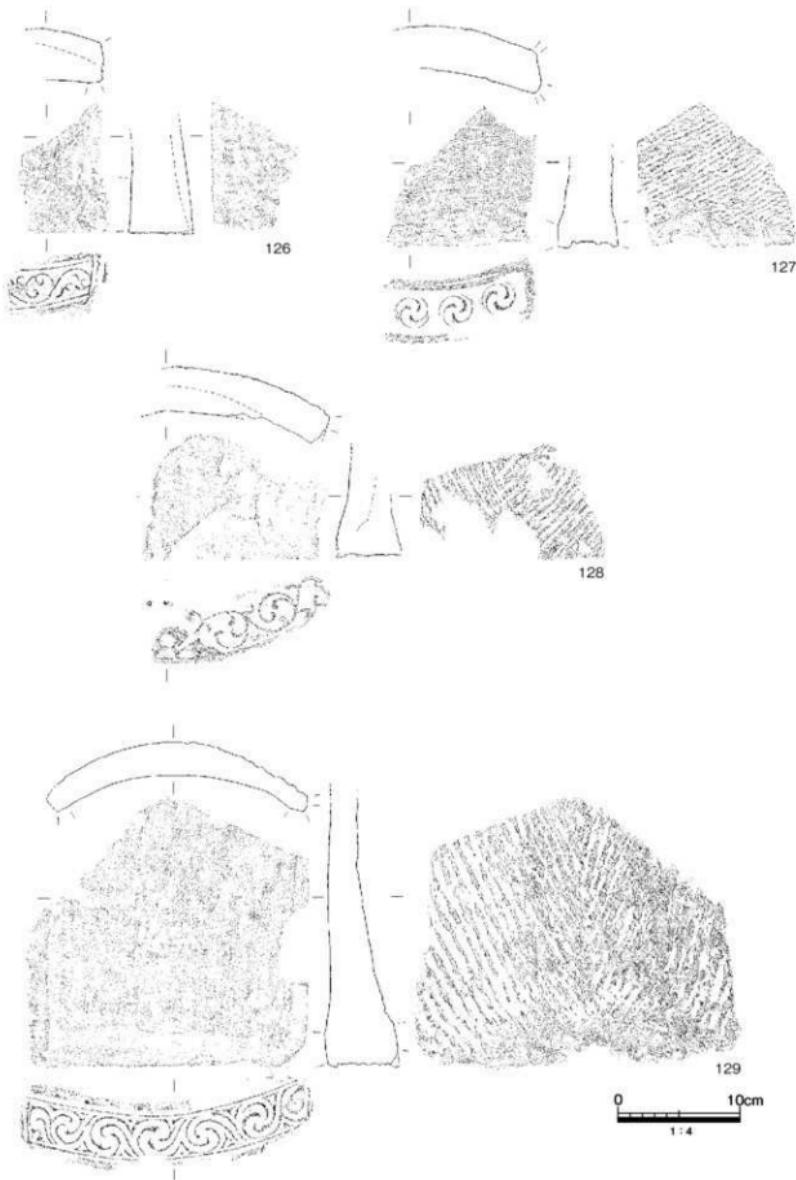
十瓶山諸窯の瓦の成・整形技法の変遷は、おおまかには以上のように説明可能だが、各瓦屋での実態には多様性が認められるようである。例えば綾川町丸山窯跡（香川県1997）では、Ⅲ・Ⅳ手法とa～cの各技法が共存する可能性があり、一方如意輪寺窯跡では、出土資料数が限られることがあるが、各資料に製作技法の多様性は乏しいようである。つまり、上述した技法の差異は、基本的には時期的変化の方向性を志向しつつも、工人のクセとしても存在し、造瓦集団の系統差と理解できる可能性がある。

こうした考えが妥当であれば、後述する丸山支群における集約化の実態として、11世紀代に十瓶山窯跡群内で分散して操業していた工人を、丸山支群へ集中させたことを説明できるかもしれない。

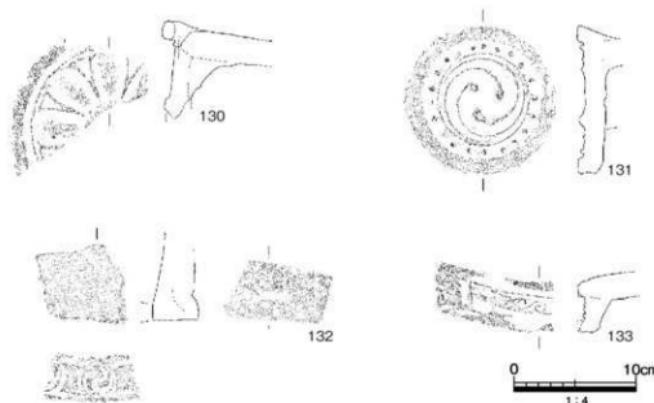
次に、11世紀後半、僧善芳による普通寺市曼荼羅寺の復興記事に注目したい。曼荼羅寺は、普通寺市北西部、我拝師山北山麓に現在も四国八十八箇所第72番札所として法灯を伝え、周辺からは平安後期の瓦が出土し（安藤1967）、後述する復興記事の信憑性を裏付ける。

さて、「諸国修行」僧であった善芳は、「弘法大師建立、無上聖跡」（平遺4631）である曼荼羅寺へ返留したが、「右道場、大師入滅已後及二百余歳、顛倒破壊已盛也、奉見此、歎涙難堪、肝膽難抑、賜隨分奉加、致修理之營矣」（平遺983）と復興を決意する

そこで善芳は、「以是罷渡安藝國、交易材木」（平遺1020）し、また「隣國彼境罷向、材木買求」（平遺1077）る等資材の確保に努め、あるいは「御任終年公事念々間、難得一大人暇」（平遺983）状況に対し



第30図 田村久雄氏所蔵遺物実測図



第31図 鎌田共済会郷土資料館所蔵遺物実測図

ては、「就中自備前國、語度令居住工三宅氏近を擬擧取」(平遺1077)等して、積極的に塔堂の修復を進めていく。

その原資となつたのは、国衙や本寺(東寺)等からの「三昧加徵」といわれる勤進・奉加米と、国衙の庇護により回復した「寺家所領田畠載流記帳十六町餘」(平遺984)等からの地子物であった。「前者は材木調達等直接に修理経費に使用され、後者は住僧や工夫の供料・食料等に宛てられ」た(野中2003)。厳密に両者が区別されていたかは速断できないが、善芳自身が大工や資材の確保に奔走し、その費用は国衙や本寺(東寺)の助力を得ながらも、曼荼羅寺が負担していることは重要である。

こうして善芳によって「改修造」された堂宇には、「講堂一宇五間四面如本瓦葺」(平遺1020)があり、その瓦に新たに焼成されたものが含まれるならば、十瓶山窯跡群から搬入されたか、出張製作の瓦が使用された可能性が高い。

一方、「延喜式」「木工寮式」の作瓦の条には、「工卅人、夫八十人、作瓦窯十烟。烟別工四人、夫八人。燒雜瓦一千枚料、薪四千八百斤。」と記されている。この記載を、小林行雄氏は、「木工寮に10烟の瓦窯が常設され、工四人と夫八人との計12人の構成をもって、瓦窯1烟に配属する」と読んだ(小林1964)。また、梶川敏夫氏は、「工4人と夫8人は1烟に伴う必要人員の単位(工1人に夫2人)であり、窯詰め、焼成、窯出し、その他の作業がこの人員で行われるべきであることを記し

たもの」と理解された(梶川1989)。大川清氏は、烟を窯の基数ではなく、操業回数であるとして、官営工房での製造能力について復元を試みている(大川1990)。

『延喜式』の編纂は、10世紀前葉に遡り、その造瓦所は、いわゆる中央官衙系瓦屋(栗柄野・小野両瓦屋)のことであり、十瓶山窯跡群と直接には比較できない。しかし、工人数に若干の増減はあったとしても、瓦窯1口を単位に工人が配属され、さらに生産量が割り当てられていた、そうした瓦生産のシステムは、古代に限れば、時代・地域を越えて普遍化できるのではないかろうか。なお、瓦工の作業に、直接瓦の焼成に関わる諸作業以外にも、「できあがった瓦を建築工事場に運び、さらに瓦を葺く作業をもふくんできた」とされる(小林1964)点は、十瓶山窯跡群からの出張製作の背景を考える上で興味深い。

十瓶山窯跡群では60基に及ぶ瓦窯が確認されている(田村ほか2008)が、そのうち発掘調査により、詳しい内容が知られるものは10基に満たない。近年調査された小坂池窯跡では、11世紀前葉頃(上原2009)の3基の有牄式平窯が検出された(綾川町2010)。1・2号窯と3号窯で、燃焼室の平面形態が異なり、また出土瓦の様相から、3号窯→1・2号窯への変遷の可能性も想定される。

十瓶山窯跡群の瓦窯は、ますえ畠支群と丸山支群を除けば、概ね1~7基程度で支群が形成されているよ

管文号	器物名	直径	高さ	口径	底径	形状	外側 色調	内側 色調	外表面形 状	内底面形 状	底径	底面等 高さ	底面等 高さ	
60	新官古窯 銀：杯	11.2	3.8	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	
61	新官古窯 銀：杯	10.5	3.7	直筒	外：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	7.8	7.8	7.8	
62	新官古窯 銀：杯	11.1	4.1	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	7.8	7.8	7.8	
63	新官古窯 銀：杯	11.3	4.8	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	
64	新官古窯 銀：杯	11.0	2.6	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	7.8	7.8	7.8	
65	新官古窯 銀：杯	11.6	3.5	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	8.8	8.8	8.8	
66	新官古窯 銀：杯	11.1	7.3	9.4	外：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	6.8	6.8	6.8	
67	新官古窯 銀：杯	11.5	8.2	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	7.8	7.8	7.8	
68	新官古窯 銀：杯	3.5	7.0	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	8.8	8.8	8.8	
69	新官古窯 銀：杯	4.4	8.65	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	6.8	6.8	6.8	
70	新官古窯 銀：杯	4.2~4.3	11.4	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	
71	城山古窯 銀：杯	11.1	13.9	12.0	外：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	8.8	8.8	8.8	
72	城山古窯 銀：杯	8.4	10.8	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	2.8	2.8	2.8	
73	千利 銀：杯	13.1	3.5	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	
74	新官古窯 銀：杯	11.9	4.9	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	8.8	8.8	8.8	
75	千利 銀：杯	11.7	3.9	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	
76	千利 銀：杯	12.5	4.0	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	8.8	8.8	8.8	
77	千利 銀：杯	11.6	4.6	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	8.8	8.8	8.8	
78	千利 銀：杯	10.6	3.6	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	
79	千利 銀：杯	11.3	3.9	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	
80	千利 銀：杯	9.2	4.0	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	
81	千利 銀：杯	7.8	7.6	7.3	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	8.8	8.8	8.8
82	千利 銀：杯	8.2	7.6	6.8	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无
83	千利 銀：杯	16.8	4.9	外：青色	内：青色	直筒	外：青色 内：青色	外：青色 内：青色	直筒	内底平	无	无	无	

第25表 開通調査資料・土器等観察1

地文区分	遺跡名	基盤	上部	基高	底径	断土	外観	内観	外観測定	内観測定	底石坐	底石坐	所見文	所見文	
4	小判	埴 地				37	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
85	小判	埴 地				115	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
86	小判	埴 地				115	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
90	小判	埴 地				126	今や基 40mm以上 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
91	小判	埴 地				107	今や基 30mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
92	圓錐形?	埴 地				107	今や基 30mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
93	埴山	土：小埴			10	49	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
94	埴山	土：小埴			116	475	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
95	埴山	土：小埴			61	11	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
96	埴山	土：小埴			62	11	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
97	埴山	土：小埴			65	265	今や基 15mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 15mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
98	埴山	土：小埴			266	55	今や基 15mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 15mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
99	瓦瓶	埴 地			72	57	-	瓦瓶	断土：外側基 15mm以下 瓦瓶	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
100	瓦瓶	埴 地			62	24	45	-	瓦瓶	断土：外側基 15mm以下 瓦瓶	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	
101	小判	土：小埴			78	14	66	断土：25mm以下の石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐
112	小判	土：小埴			90	16	61	断土：15mm以下の石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 15mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐
103	小判	土：埴			101	18	64	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐
104	小判	土：埴			111	61	67	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐
115	小判	土：埴			140	41	79	今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐
116	圓錐形?	埴 地					今や基 25mm以下 石敷等を多基含む	外：内：底板 N40	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
117	良質な瓦瓶	埴 地			157	31	1+5	5.3	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
118	八角形瓦瓶等	埴 地			169	32	1+5	5.6	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	
119	圓錐形?	埴 地			47	1+5+8	4.8	3.2	断土：外側基 25mm以下 石敷等を多基含む	内：底板 N40	底石坐	底石坐	底石坐	底石坐	

第 26 表 関連調査資料・土器等観察表2

第 27 表 関連調査資料・古代軒丸瓦観察表1

筆文号	通鑑名	型式	直徑	内径	外径	厚さ	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	
110	國法令文	盤狀	内径	半圓形	圓形	長方形	圓形	長方形	圓形	長方形	圓形	長方形	圓形	長方形	圓形	長方形	圓形	長方形	圓形		
111	御中正官印	人頭像面圓章文	156	5.4	1 + 8	3.7	2.4	2.9	1.1	0.9	6.1 +	今等有 4.3mm 以下の石裏合。四: 黄色。頭部面。ナフ	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	
112	御中正官印	人頭像面圓章文	168	4.1	1 + 4	3.0	1.6	4.2	1.6	1.8	1.3	16.1 +	頭部面。白石裏等。内: 黄色。外: 銀色。頭部面。ナフ	頭部面							
113	御中正官印	人頭像面圓章文	134	6.6	1 + 4	3.0	2.1	2.3	1.5	1.9	1.3	16.1 +	頭部面。白石裏等。内: 黄色。外: 銀色。頭部面。ナフ	頭部面							
120	御中正官印	人頭像面圓章文	145	4.5	2.3	1.1	1.1	1.0	7.8	7.8	7.8	16.1 +	頭部面。白石裏等。内: 黄色。外: 銀色。頭部面。ナフ	頭部面							

第 28 表 開連調査資料・古代軒丸瓦觀察表 2

筆文号	通鑑名	型式	直徑	内径	外径	厚さ	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	
115	印付	三巴文	177	3.6	1.6	1.45	2.0	2.0	1.0	1.1	3.9	16.1	丸底。内: 黄色。外: 銀色。頭部面。ナフ	頭部面							
132	印付	三巴文	223	7.5	6	3.65	2.1	1.2	0.65	1.5	2.5+	丸底。内: 黄色。外: 銀色。頭部面。ナフ	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	頭部面	

第 29 表 開連調査資料・中世軒丸瓦觀察表

筆文号	通鑑名	型式	直徑	内径	外径	厚さ	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁
112	東山御物書	圓形	1.5	1.35	2.3	1.3	2.6+	0.2	3.7	2.6+	0.2	2.6+	0.2	2.6+	0.2	2.6+	0.2	2.6+	0.2	2.6+
114	徳川御印	均勻體書	5.8	3.1	4.1	1.3	14.3+	0.8	12.5	10.9+	0.8	12.5+	0.8	12.5+	0.8	12.5+	0.8	12.5+	0.8	12.5+
126	東山御物書	圓形	5.25	2.95	5.95	1.35	16.5+	0.2	13.85	12.5+	0.2	13.85+	0.2	13.85+	0.2	13.85+	0.2	13.85+	0.2	13.85+
127	東山御物書	圓形	5.1	2.65	3.15	1.0	11.8+	0.5	13.3	10.5+	0.5	13.3+	0.5	13.3+	0.5	13.3+	0.5	13.3+	0.5	13.3+
128	東山御物書	圓形	5.4	4.0	6.0	0.5	8.3+	0.3	7.265	6.0+	0.3	7.265+	0.3	7.265+	0.3	7.265+	0.3	7.265+	0.3	7.265+
129	東山御物書	圓形	3.9	3.9	4.0	1.0	10.9	0.9	22.1+	2.3	0.9	22.1+	2.3	22.1+	2.3	22.1+	2.3	22.1+	2.3	22.1+
131	東山御物書	圓形	3.9	2.6	3.7	0.7	10.6	0.6	6.1+	0.15	0.15	6.1+	0.15	6.1+	0.15	6.1+	0.15	6.1+	0.15	6.1+
133	八十八宿	圓形	4.1	3.3	4.35	1.35	12.6	1.25	16.5	2.1	1.25	16.5	2.1	16.5	2.1	16.5	2.1	16.5	2.1	16.5

第 30 表 開連調査資料・軒平瓦觀察表

筆文号	通鑑名	型式	直徑	内径	外径	厚さ	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁	内壁	外壁
116	小町	丸底	2.45	2.15	2.65	0.9	1.9	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9
117	小町	丸底	2.5	2.05	2.65	0.9	1.9	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9
119	小町	丸底	2.6	2.05	2.65	0.9	1.9	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9
120	小町	丸底	2.4	2.05	2.65	0.9	1.9	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9
121	小町	丸底	2.25	1.9	2.35	0.8	1.9	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8
122	小町	丸底	2.3	1.9	2.35	0.8	1.9	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8
123	小町	丸底	2.25	1.9	2.35	0.8	1.9	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8	16.5	0.8
124	小町	丸底	2.45	2.1	2.4	0.9	1.9	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9
125	小町	丸底	2.45	2.15	2.45	0.9	1.9	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9	16.5	0.9

第 31 表 開連調査資料・銅錢觀察表

うだ（田村ほか2008）。上述した小坂池窯跡例の2~3基という窯数は、十瓶山窯跡群瓦屋の最小経営単位（以下、工房と称する）と理解することができる。7基の窯が分布する北条池支群でも、支群内部の窯の分布傾向から、2~3基の窯を単位にした2~3グループに分割できるようあり、小坂池窯と同規模の経営単位が復元できる。北条池支群の場合は、2~3工房が近接して同時操業していたが、1工房が比較的長期に場所を微妙に移動させながら、操業を継続したかのどちらかと想像される。詳細は今後の課題だが、北条池支群の各工房が同時操業していたとしても、十瓶山窯跡群では最大3工房によって、各瓦屋が經營されていたと推定される。

つまり、11~12世紀前葉までの十瓶山窯跡群の瓦屋は、各工房が2~3基の小規模な有牴式平窯を築き、複数工房によって瓦が焼成されていた。基本的に各工房では單一型式の軒瓦を焼成したと考えられるが、複数型式の瓦が採集される窯跡も散見される（田村ほか2008）ことから、長期經營されていた工房も含まれるだろう。「寄せ集め」と表現される瓦の様相は、十瓶山窯跡群におけるこうした小規模分散型複数經營を背景としていたと考えたい。

既述した曼荼羅寺例のように、寺院からの伽藍修造のための大工派遣の申請は、国衙を経由して届けられ、瓦工の出張製作が実現された。そして、出張製作により築造された各瓦窯の規模と、十瓶山窯における各工房のそれとが一致することは、工房を単位に出張製作がなされており、それは国衙による瓦生産の管理単位でもあったことを示している。

この時期には、讃岐国内の各寺院において、讃岐瓦屋で焼成された瓦が消費されていることは事実である。その背景に、「弘法大師にまつわる聖地として、古代寺院の復興が讃岐国内で積極的に推進され」た（上原2001）可能性も考えられる。しかし、問題はこの時期、讃岐国衙がどのようにして瓦屋を恒常に經營するシステムを整えたのかという点にある。十瓶山窯の経営コストを、京都以外の顧客として、国内の寺院の需要によって賄っていたことは十分予想される。この点は、今後の課題としたい。

さて、こうした状況が一変するのが、12世紀中葉とされる、大型窯の導入により集約生産を意図したますえ煙支群と、従来型の小規模窯を群集させ、巴文系瓦に特化した集中生産を志向した丸山支群の出現である。

12世紀中葉以降、こうした2つの方向性を模索しながら、あるいは既述した個々の製品の規格品化、製作工程の省力化等も講じることによって、十瓶山窯跡群では徹底的な量産化を追及していく。

上原氏は、知行国制の大規模集約型經營を「集中管理」と呼び、この時期のますえ煙支の製品や速巴文軒平瓦が、讃岐国内の寺院で消費された形跡がないことを指摘した（上原2009）。しかしながら、この時期に讃岐国内の寺院で、瓦の消費が断絶したわけではない。巴文軒丸瓦は各地の寺院にあり、丸山窯と同文の速巴文軒平瓦も少量ながら遠隔地での出土が報告され（安藤1967、片桐1999）、既に安樂寺例を紹介したように、京へ搬出された以外の型式の巴文系軒平瓦（これらの製品には、胎土や焼成が、十瓶山窯跡群の製品と比べて、大きく見劣りするものが多い）もみられる。これらは採集資料が大半であることから、今後調査が進展すれば、資料数が増加することは確かであろう。つまり、この時期には、京都への搬出専用の製品と国内消費へ振り向ける製品の生産が、異なる瓦屋で担われた、瓦生産が二極化した可能性も想定される。

しかし、12世紀末~13世紀前葉頃を境に突如として、十瓶山窯跡群での瓦生産は途絶える。その背景としては、京都での消費に大きく依存し、必要以上に生産能力を肥大化させたことも要因と考えられる。

11~12世紀の十瓶山窯跡群における瓦生産の実態を、以上のように整理した。いくつかの画期の存在とその背景について若干の予察を示したが、より詳細な実証的論証は今後の課題としたい。さらに、讃岐国衙の動態との関係も、十分に意を尽くせなかった。

国衙による十瓶山窯跡の經營・管理に関しては、北条池1号窯跡と庄屋原2号窯跡から出土した刻印須恵器を素材に、考古学的な面からの中山尚子・佐藤竜馬両氏による考察がある（中山・佐藤1998）。

両氏は、須恵器に刻印された「中」字は那珂郡を指し、「那珂郡に須恵器貢納負担の割り当てが行われ、そのチェックのために施印された」ものであり、チェック機関として国衙を想定した。そして、刻印が入念に消去されていることから、チェックは施印時、つまり土器焼成前になされたことから、貢納者は「窯場に関連する経費の負担もしくは製作以外の労働や国衙への労働に從事することで負担を賄っていた」ことを想定する。

検収システムの実際にまで踏み込んだ重要な指摘をなされたが、細分化された各製作工程単位での貢納負担とその検収行為がありえたのかどうか、別の視点から今後検証する必要があろう。いずれにせよ、瓦生産のみではなく、須恵器をも含めた十瓶山窯跡群全体の生産・貢納システムの解明に向けた努力が今後も必要である。(蔵本)

第6節 総括

地名調査を通じて、地名が秘める可能性を再認識する一方、その限界性を強く痛感した。なかでも、国府関連地名の多くが、この地に讃岐国府が所在していたという認識に基づき伝承されてきたという事実は、地名が内包する潜在的な不安定性を如実に示すものであり、地名と地形から推測した讃岐国府(国府)の所在地を発掘するという事業の根幹に係わる問題となる。今年度の地名調査では採集地名と文献資料との比較検討という操作によって、歪曲性の緩和に努めたが、その限界性は否めない。採集地名の検証作業方法の摸索とともに、文献資料の掘り起こしが地名調査の今後の課題となる。(松本)

地形調査は、地形分類に必要な地表面のデータの収

集は進捗したが、堆積状況に関するデータの収集が不十分である。また、地割の検討や水利慣行調査も進行途上であり、地名調査や発掘調査の成果と相互に検討を深めていくという当初の方針に対し、やや立ち遅れの感がある。綾川の段丘の形成年代の確定とともに、来年度以降に検討を深める必要がある。(木下)

発掘調査では、11世紀後半以降の調査地周辺の土地利用の変遷の一端が明らかとなった。とくに、12世紀後半～13世紀中葉を中心とした建物跡群が検出された意義は大きい。この建物跡群の性格については、過去の調査の再整理や他地域の事例との比較検討を必要とする。今後の課題としておきたい。

また、本稿では紹介できなかったが、古代の遺物として、須恵器、土師器のほかに、縁釉陶器、灰釉陶器、布目瓦等の小片が、微量ながら出土している。遺構は確認されなかったが、これらの遺物からは、やはり周辺に讃岐国府が所在したものと考えられる。これまでの調査成果を踏まえるなら、讃岐国府は今回の調査地よりも、より東の地域に所在した可能性が想定される。「香川県文化芸術振興計画」に示された、「昔原道真が国司として執務をした」古代の「讃岐国府の政府跡の解明」については、今回の調査により、より地域を限定する知見が得られたものと評価できる。(蔵本)

引用・参考文献

- 安藤文良 1967 「讃岐古瓦図録」「文化財協会報」特別号 8
上田義編 1974 「瓦瓦百選(讃岐編)」美巧社
上田義編 1998 「河原町の高麗式瓦丸瓦...一河内を中心として」『飛鳥時代の瓦づくり』2
上田義編 1999 「高麗式瓦丸瓦と酒井系氏族...一出土瓦から見た河内の古代寺院と氏族3』『瓦瓦千年』森裕夫先生追憶記念論文集刊行会
上田義編 2007 「飛鳥時代の河内出土瓦」『河内古代寺院巡礼』大坂直立近藤飛鳥博物館
上田義編 1997 「古瓦未期における瓦生産体制の変遷」『古代研究』12・14
上田義編 2001 「平成十四年の平安時代後期瓦の様相...一産生地認定法と在地消費をめぐって」『第4回丹波河東古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け ~11・12世紀の寺院の考古学的研究~』
上田義編 2003 「初期飛生産と生倉制」『京都大学文学部研究紀要』第42号
上田義編 1999 「河内出土瓦の御所十二鏡」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』
宇治市教育委員会編 編
大庭義編 1990 「木工資料」の『瓦瓦三十種』について『今里幾次先生古碑記念』播磨考古学論叢
大山亮光 1999 「香川県出土の土器の十二鏡」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』
香川県教育委員会編 1982 「讃岐国府跡...一国庫施設による国庫確證調査概要一」
香川県教育委員会編 1997 「赤道寺第3段築場整備工事に伴う古墳文化財発掘調査概要 丸山古墳」
香川県歴史博物館・香川県埋蔵文化財センター共同調査・研究班 2007 「松山津川辺の景観」『四国村落道路研究会シンポジウム 津川の草像...一中津港町・野原と讃岐の町』
鷹谷大輔 1989 「京都源北における造瓦窯...一栗原野瓦窯跡の追加調査~」『古瓦研究』
片桐千浩 1999 「大木上神社と新古瓦について」『香川考古』第7号
川瀬透・渡部邦夫 2008 「坂出市新宮古墳出土埴輪について」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』
木下良 1977 「60代の「十字街」について」『歴史地理学会紀要』19
金田希義 1996 「山城の形態と構造について」『独立歴史民俗博物館研究報告』第63集
藏本哲司 2005 「中世の考古学」『さみさき団扇の町』
小林谦一・佐川正義 1989 「平安時代...近世の軒丸瓦」『法隆寺昭和賞賛集典編第10 伊刻留』小学館
坂出市教育委員会編 1992 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成3年度国庫補助事業報告書~」
坂出市教育委員会編 1993 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成4年度国庫補助事業報告書~」
坂出市教育委員会編 1995 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成5年度国庫補助事業報告書~」
坂出市教育委員会編 1996 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成7年度国庫補助事業報告書~」
坂出市教育委員会編 2002 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成13年度国庫補助事業報告書~」
坂出市教育委員会編 2003 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成14年度国庫補助事業報告書~」
坂出市教育委員会編 2004 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成15年度国庫補助事業報告書~」
坂出市教育委員会編 2005 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成16年度国庫補助事業報告書~」
坂出市教育委員会編 2008 「坂出市内道路交差点別古瓦報告書...一平成19年度国庫補助事業報告書~」
佐藤克也 1990 a 「讃岐における古代の火葬墓」『附注古人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』
佐藤克也 1990 b 「香川県十瓶山窯跡群にける組紐編年」『関西大学考古学研究室開設4周年記念考古学論叢』

- 佐藤電馬 1997 「7世紀譲岐における須恵器生産の展開」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V』
- 佐藤電馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発見調査報告第4番 空港跡地道路Ⅱ』香川県教育委員会
- 清水昭博 2000 「高勾頭系瓦の分布とその背景 - 瓦山遺跡を中心に-」『古代文化』第52巻 10号
- 新宮史編集委員会編 1993 『新宮史』
- 高松市教育委員会編 2007 『特別史跡譲岐国分寺跡・如意輪寺跡路・因分中西道路・免子山道路』
- 高松市教育委員会編 2009 『高松市指定史跡・片瀬遺跡群 - 確認調査報告書 -』
- 高松市教育史資料館編 1996 『第11回特別展 譲岐の古瓦展』
- 田村九郎・渡部明夫・渡邉義 2000 「陶(十郷山)窯跡群の瓦生産について(1) -瓦窯跡の分布-」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』IV
- 中山尚子・佐藤電馬 1998 「北池1号窯跡採集の割引額と窯の構造 - 十郷山窯跡群の須恵器とその概算課題(3) -」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要VI』
- 蓮本和洋 1993 「譲岐における白鳳寺院出土瓦の研究 - 川原寺式瓦と丸瓦の系譜の作成を通して-」『香川県自然科学研究所研究報告』第15巻
- 花谷正 1998 「大和・飛鳥寺・農道寺の創建人」『飛鳥時代の瓦づくり』2
- 羽林正明 1980 「『延喜式』大宝三年三月丁丑の制と譲岐姓氏」『文化財協会報』76
- 羽林正明 1985 「保の成式についての一考察 - 陶・円窓・両保を中心にして-」『香川史学』第14号
- 藤井直正 1978 「譲岐圓法寺考 - 国府と古代寺院-」『歴史と美術』第485号
- 松浦正一 1968 「歴史的代」『香川県文化会館郷土資料室別冊目録』、第1期
- 松浦正一 「香川県貴重骨董出土地表」〔独立〕『ユージアム藏』、松浦正一文庫 809番
- 松原弘吉 1988 「古代の地方豪族」『香川弘文館』
- 山崎信二 2000 「中世瓦の研究」『奈良国立文化財研究所』
- 横田賀次郎・森田勲 1978 「大宝府出土の輸入中国磁器について - 型式分類と編年を中心として-」『九州歴史資料館研究論集』4
- 森浩一 1968 「衝電道の古代窯業道路とその問題」『日本歴史』第233号
- 渡部明夫 1980 「譲岐島の須恵器生産について」『淡山猛先考古標記念古文化論叢』
- 渡部明夫 1998 「考古学者からみた古代の鐵工(1) - 鐵氏の出自と性質及び支配領域をめぐって-」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』VI
- 渡邉義 2007 「如意輪寺跡採集糸瓦の時間的位置づけとその意義」『特別史跡譲岐国分寺跡・如意輪寺跡・因分中西道路・免子山道路』高松市教育委員会

写 真 図 版

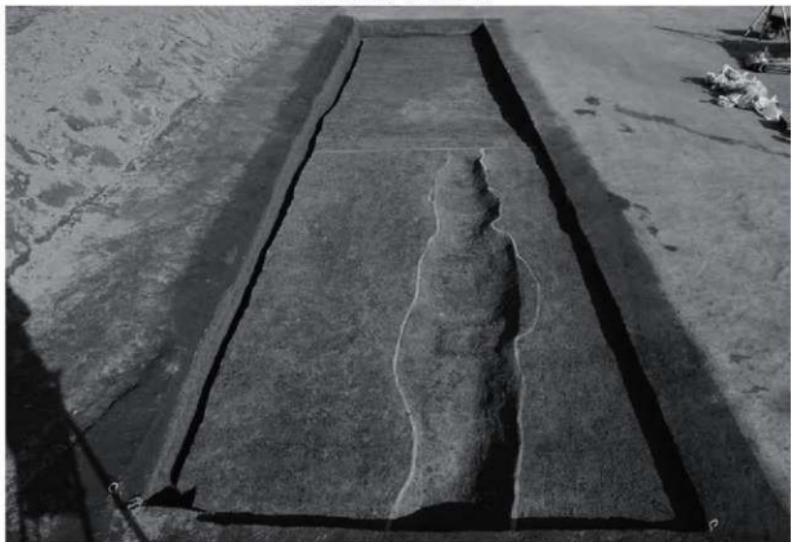


岐阜国府跡付近空中写真（上が北、国土地理院 1962 年撮影）

図版2 遺構

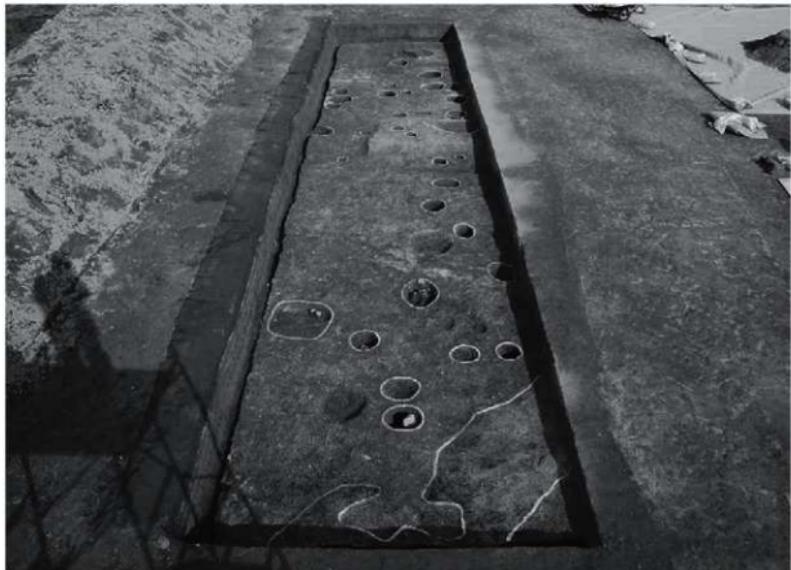


調査地遠景（南東より）



第1遺構面全景（西より）

図版3 遺構



第3遺構面全景（西より）



第4遺構面全景（東より）

図版4 遺構



南谷に残る掘割状の平坦地地形（西より）



SP10 遺物出土状況（南より）



SP08 遺物出土状況（北より）

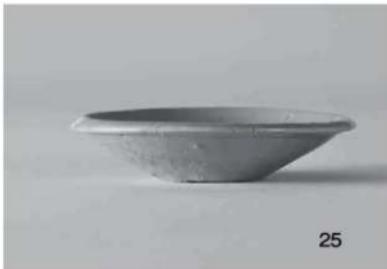


SK02 遺物出土状況（南より）



現地説明会風景

図版5 土器・陶磁器



25



58



9



26



32



50



-



40

香川県埋蔵文化財センター年報

平成 21 年度

平成 22 年 9 月 10 日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒 762 - 0024

香川県坂出市府中町南谷 5001 番地の 4

電 話 (0877) 48 - 2191

F A X (0877) 48 - 3249

印 刷 四国工業写真株式会社